
姉弟演技

一零七

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉弟演技

【Nコード】

N6637S

【作者名】

一零七

【あらすじ】

主人公・涼は高校生でございます。涼君は妹様とある約束を交わしておりました。

それは、蝉が鳴き出し始め、初夏に入る頃でした。「テストの点数が上だった方の言うことを何でも一つだけ聞く。」ということでした。そして、運命のテスト返却日：それは現実となりました。妹様が涼君の点数を1点上回りました…。その結果、妹様の要望により涼君は弟に、妹様は姉へ…。
って感じで始まります。

なんだよそれ？（前書き）

これは天才小学：もとい高校生の橋^{たちはなりょう} 涼君とその妹様の華琳^{かりん}ちゃんが織り成すちよっとラブなコメディーな作品です。

なんだよそれ？

「なあ…本当にマジで行くのかよ？」

「本当もマジも私は本気だよ？それに、涼に選択肢なし！」

「はあ…もう、嫌だよ…何なんだよ…家に帰りたいよ。」

「駄々こねないでよ…本当に小学生に見えるよ。」

「ああ、何でこんなことになっちまったんだよ。」

「涼がテストで負けたからでしょ？」

そう。事の発端は妹である華琳かりんの一言から始まったのだ。

～回想～

バアアアアアンンン！！

「うおおおおお！！！！？？？？」

「涼！」

振り向くと部屋のドアが蹴破られていました。

「涼！無視するなんてひどいよ！」

涙目のイノシシがこちらを見ながら怒っている。

「ああ、ごめん。ヘッドホンしてて何も聞こえなかった。それより

…」

俺は華琳の後ろに倒れる板（元ドア）を一瞬みて

「なあ、これで何回目？少し体がでかくなったからってこれですか？力があるから実力行使ですか？」

華琳は高校に入る前から急激な成長を遂げ身長が10cm弱伸びました。身長が伸びるといことは当然筋肉も増えるということだ。

「いや～ははは～」

「いや～ははは～…じゃねえんだよ！これでドア変えるの4枚目になるぞ！いい加減ドア蹴破る以外何か文明的なドアの開け方考えろ！」

「いや～カギカッターカラスカタナイヨネ。」

「なぜ片言になる。」

「それより！それより！」

華琳はビシツ！と俺を指差す。

「勝負だ！涼！」

「はぁ？何の勝負だよ？」

「高校の中間テストだー！」

「……………??？」

……………何考えてるの？敵^{かな}うわけねえだろ。俺自分でも言うのなんだけど頭いいよ？少なくとも今、目の前に立っているイノシシよりは頭いいよ？それが？テストで勝負？めんどくせえ。

「敵うわけねえだろ？それに勝負して俺に何のメリットがある？めんどくさい。」

「いいじゃん？点数見せ合うだけだし。どかがめんどくさいのよ？」

「一々負けたことに落胆するお前を見ること。」

「むきー！何それ！勝つ前提で言ってるでしょ！」

「当たり前じゃないか？俺のどこに負ける原因がある？」

「……………チビのくせに。（ボソツ）」

「今なんか言った？言ったよね？聞こえましたよ？おい？こっち見るよ？」

「ナニモツテイナイヨー。」

くそ！俺より身長がちよつと高いからとふざけてやがる。一度完膚なきまでに打ち負かしてやるうか。

「よし。いいだろう。受けてやる。」

「よっしやー！」

めつちやガツポーズを取るイノシシ。この後起こるテストの惨状を知らないとは…ふっふっふ、微笑ましい。

「もう、言うことないだろ？さあ、帰った帰った。」

「待って。」

「なんだ？まだなんかあるのか？生憎俺は新作のゲームを友達から借りていてだな」

「一つ条件がある！」

「……………条件を付けるのは俺の方では？」

「一つ条件がある！」

「なぜおまえが条件を出す？」

「一つ条件がある！」

「話聞けよ！」

「一つ条件があるっ！！！！！」

……………だめだ。こいつ話聞く気全くないぞ。とりあえず話だけでも聞か。

「いってみるよ。」

「ただ勝負するのは楽しくないので罰ゲームを決めよう！」

「内容は？」

「一つだけなんても言うことを聞く。」

ふう。俺の妹ってここまでアホだったのか。負け戦に賠償金まで払う手筈を整えるとは……………。

「いいだろう。まあ、覚悟しとけよ。」

「ふっふっふ、そつちもな！」

華琳は悠々と俺の部屋を出てゆく。

「さらばだ！……………がんばってドア直してね」

「まっ……………て……………」

遅かった……………また逃げられてしまった……………。なんてことだ……………。

「うわぁ……………マジかよ。これ一人で直すのかよ。俺はドア職人じゃねえんだぞ。」

板（元ドア）を見ると幸い金具が外れているだけの様で簡単に直せそうだ。

「4枚目にして上手くドアを蹴破る技術を習得したのか……………。全く無駄な技術を。」

私の特技はドアを壊さず蹴破ることです！ってか！？もう蹴破っ

てるから壊れてるんだよ！

家にある工具を持ってきてドアを直し一息つく。

「ふう…終わった〜。だつる。すっごいだる。あいつ帰って来たら数式の地獄に陥れてやるう。」

頭を抱えて転げまわる華琳の姿が思い浮かぶ。いい気味だ。ドアを蹴破った代償を取らせねばいかん！

待っている！ドア！きつと君の仇は俺が取ってやる！
計画を立てながらも、ふと思う。

「あいつ勝つ気満々だったな…。」

あの自信とやる気はどこから湧いてくるのだろうか。ここ数年は勝負なんて言わなかったのに。

「まっ！あいつに負けるなんてないんだけどね！」

若干、フラグみたいな台詞だがフラグなんて回収すればいいのだ。回収すれば。

「おっと、ゲームの続きをしなければ。」

華琳が相手だし、勉強なんて明日からやればいいかな？

テスト返却日

「バアアアアアアンンン！！…ってあれ？開いてる？」

「お前壊す気満々だったね？「バアアアアアアンンン！！」とか言っつて壊す気だったよね？」

「ソナナコトオモツテモミナカタヨ。」

…こいつ都合が悪くなると片言になること自覚してるだろうか？
考えていることがバレバレだが…。

「…まあ、いい。お前も今日テスト帰ってきただろ？それでどんな風に勝負する？1教科？全教科？」

「全部に決まっておろうが！たわけ！」

「黙れい！無礼者が！この紋所が目に入らぬか！」

俺はすかさずすべてのテスト用紙を並べる。合計は489点。ま

あまあな点数だ。だが、今まで華琳が440点を超えるところを俺は見たことがない！なぜなら、華琳は英語が苦手だからだ！

「さあ、跪け。そして、俺を敬え！」

椅子に踏ん返り返って華琳を見る。

「りよ〜うちゃ〜ん？言いたいことはそれだけでちゅか？」

ニタニタ笑いながらゆつくりと俺に近づいてくる。

「なんだと？」

「これを見る！」

華琳は俺に5枚のテスト用紙を突き付ける。合計。490点。：

おかしい計算を間違えたらしい。少し熱があるみたいだ。今日は早めに寝よう。改めて、合計。4・9・0。490点。

「お前の負けだ。」

「ふざけるな！これは何かの間違いだ！こんなことがあるはずないだろ！」

「いいや、本当だ。私は弱点である英語を克服したのだ！」

「そんな…馬鹿な。」

「はっはっはー！いい気味だ！復讐心に燃える私に敵う者などいないのだ！さあ、次はこっちに言わせて貰おうか！」

目の前にいたのは清々しい顔をした悪魔でした。

「何でも言えよ。できる限りで従ってやるよ。」

俺はというと……、妹に負けたショックで完全に燃え尽きて灰になったボクサー状態でした。

「では、罰ゲームを宣告する。」

一々仰々しく言いやがって腹が立つぜ。とか普段は思っただろうけどショックで反応できませんでした。

「お兄ちゃんはこのから来る夏休みの間、私の弟として過ごしてもらいます。」

……

……

……

へ？
：

：
なんとおっしゃいましたか？妹様？

なんだよそれ？（後書き）

余談「数式地獄編」

「っ！！」

家に帰ると涼が玄関で仁王立ちしていた。

「…やばいやばいやばい！めっちゃ怒ってる！なんで！？なんで！？私何か悪いことした！？だめだ、笑ってる。ここはご、ご機嫌とらなきゃ…きつとあの地獄が始まってしまっ！」

「おに〜ちゃん！どうしたの？そんな怖い顔して？華琳怖くて泣いちやいそう…うるうるしくしく。」

どうだ！この最強の声と顔でこんなか弱い少女がうるうるしくしく泣きそうになっているんだ！これは怒れないだろう！あれ？なんか目を閉じて深呼吸してる？なんで臨戦態勢取ってるの！？まさか！私の攻撃が通じなかったのか！

「華琳…。」

「はひっ！！」

「ドアが壊れた時、金具にかかった力の計算をしよう。」

「…ドア？壊れた時？」

「…ああ！そのことか！」

ブチッ！…私は確かに聞いたのです。何かが切れる音を。

その後、涼の部屋に行き理解できるまで金具にかかった力を計算しました。

「そこちがーうー！」

「…………。」

「そこはこの公式を入れるっていったらだろ！」

「…………。」

「ここ計算間違ってるー！」

「…………。」

「はい、次は下の金具にかかった力の計算しまーす」

「……………にゃあ”あ”あああ！！！！！」

ついに限界が来たのか頭を抱えて転げ出す華琳。

仮にも女の子が奇声上げながら転げまわるとは…計算怖い。

「やっと壊れたか。」

「にゅわああああ！！！！！」

「今回は結構長かったな…少しずつではあるがこいつ頭良くなっているかもしれないな。」

「によおおおお！！！！！」

「もう、いいから。部屋帰ってもいいぞ。」

「本当！？やった！バイバイ！」

猫のような素早い動きで帰っていく華琳。

「…一応、限界来るまで素直にやるから悪いやつではないんだよな

……………」

夏休み前夜（前書き）

今回は夏休み入る前日のお話。これからの夏休みどのように過ごすか作戦会議するはずだったんですが…。

夏休み前夜

さて、明日から夏休みだ。なんだが…勉強から解放され自由に夏休みを謳歌おつかしようとしている矢先にこれだ。俺は明日から妹の弟になるらしい。意味がわからない。兄なのに弟って…馬鹿にしてるだろ。いくら身長が低いからって…。まあ、身長の話はいい。

それより、明日から夏休みだ。なのに、話の一つもないのかあのイノシシは！どうやって夏休みの間弟で過ごすんだよ。周りからどう見ても俺の方が年上に見えるだろうが！

ということで、今はあの馬で鹿でイノシシな妹の部屋の前にいる。華琳かりんの部屋と俺の部屋の間には歴代のドアたちが並ぶ。おお、お前は初代じゃないか！ドアノブが完全に破壊されて…。ああ、お前は二代目。可哀想にど真ん中に穴を空けられてしまって…。お前は…三代目か…。もう、形が…。3枚の板（元ドア）に手を合わせて供養する。

「お前らの仇もいつか」

「誰かいるのかー！」

「思いつきりドアが開く。当然、俺に当たる。俺は吹っ飛ぶ。」

「誰だー！って涼か。」

「い、痛い…。（ガクッ）」

久しぶりだぜ。意識が飛ぶほど吹っ飛ぶのは、あれは何時だったかな…たしか、三代目の時

「そんなところで寝てると風邪引くぞ。お〜い？」

ん？おかしいな？

「お〜い？」

頬をペチペチと叩いてみる。

「う〜ん。返事がないな。寝ているのか？仕方ないな、運ぶか。」

ひよい。

「いつも軽いな。涼は。簡単に持ち運びできるよ。」
涼の部屋近いし、私の部屋に入れるのもなんだし、涼の部屋行くか。

たったった。

ガチャガチャ。

「およ？鍵掛かっているのか…よし、ここは一発」

「や…やめ…て…。」

「……………」

ベツニカワイイナンテオモツテナインダヨ。ホントダヨ。

仕方ないな。私の部屋に戻るか。

「ん。ここに置いておくか。」

ベッドの上に涼を置いておく。

「にしても軽いよね。携帯のストラップにできるぐらい軽い。」

今度試しにぶら下げてみようかな。

「う……………ん。」

大きく腕を上げ伸びをする。

「明日から夏休みか。」

ベッドで寝る涼を見る。身長約160cm。正確には159.3

cm。高校生にしては小さい。だからと言って小学生としてはちと

でかい。押し通せるかな。

涼のほっぺをつねる。

「う……………ん。」

ふ、ふっふ。頬が緩んでしまう。いつもあんなにカリカリして
るのに寝てる時はこれだもん。これがあれか？世に言うギャップ萌
えなのか？可愛いな。

一頻り涼のほっぺで遊んだあと、また考え事をする。

う…ん。あれだ。歩にも紹介しに行こう。それと、恭子に知恵あ

とは、奈津実だ。今からメール送っておこうかな。

夏休みに涼と遊びに行く約束を取り付ける。もちろん、涼は弟と

してだ。4人には涼のこと話したことないしね。

「みんなのところにも弟と遊びに行くね。っと、送信！」
夏休み楽しみだな。

そう！あの時！三代目ドアが俺に向かって飛んできたのだ！俺の世界の時間は止まりスローモーションで少しずつ流れた。ドアの破片が俺の顔を掠めていった。そして、一番大きな破片を避けた後…
やつのハイキックが唸りを上げて俺の左側頭部に…

「うわああああ！！！！……………あ？」

ここはどこだ。俺の部屋じゃない。部屋はピンク色のカーテンやら壁紙で統一されている。横を見ると華琳が寝ている。ってことは…

「ここは華琳の部屋か。」

部屋にはでっかい鏡があり、壁には学校の制服がかかっている。通っている高校が違うので華琳の制服を見るのは新鮮な感じがする。毎日朝に見てるんだけどね。

おそらく下着や洋服などが入っているであろうタンスはやはりピンクである。タンスの上には小ささまざまなキャラクターの人形が置かれてる。

机の上は驚くことに何も無い。いや、むしろ当然か。こいつ勉強しないもんな。だが、なぜ勉強で俺を負かせるほどになったんだろうか？謎だ。

代わりとっては何だが、机の隣にはハンドボールが置いてある。こいつハンドボールめっちゃ強いんだよね。全国大会に出場する程だ。家は道場やって俺達兄妹は小さい頃から武術の鍛練してたんだよね。華琳は俺より断然強いんだよね。運動能力は他の人よりあるし、身長は高いし…ふう、たまに自分が情けなくなるよ。って、
「今更だが、なぜ俺はここで寝てるんだ？」

うーんと？確か華琳に何か言いに来て…それから…記憶がない。
俺がなぜここで寝ているのか悩んでいると、

「うにゃー、ふああ。あれ？涼起きたの？」

「ああ。」
「そっか、よかったよかった。」
「少し聞いていいか？」
「うん？いいよ〜なに？」
「なぜ、俺はここで寝ているんだ？」
「う〜んとなんか知らないけど、廊下で寝てて、風邪引きそうだった起こそうとしたんだけど、起きなくて、だから涼の部屋に運ぼうと思ったら、鍵が掛ってて、仕方がないからここで寝かせてた。」
「そっか、わざわざありがとうな。」
「いやいや、大したことはしてないですよ。」
「しかし、どうして俺は廊下なんかで寝ていたんだろ〜。」
「きつと、部屋が暑くて廊下の冷たさを堪能してたら自然と寝ちゃったんだよ。」
「いや、それはないだろ。」
「わからないよ〜。人間頭が熱くなったら何仕出かすか分かったもんじゃないよ〜。」
「それはお前のことだろう！三代目ドアの悲劇を忘れたのか！」
「あれは涼が悪いんだよ。」
「たかがプリン1個であそこまですることないだろ！」
「食べ物への恨みは恐ろしいのだ〜。」
手をわしゃわしゃさせる華琳。
「まあ、とりあえずありがとな。俺は部屋に戻るわ。」
俺はベッドから降りる。
「あ〜、待って待って〜。」
「ん？」
「明日友達の家遊びに行くから。」
「ああ、そっか。いつてらっしゃい。」
「涼も一緒だよ。」
「……………」
「もちろん、明日は夏休み。さっそく罰ゲーム開始だね。」

「マジンガよ……」

夏休み前夜（後書き）

本当は余談として、「三代目ドアの悲劇」を載せようと思っていたのですが、思った以上に話が長くなってしまい：結果的には本文より長くなってしまいました。

そのため、ちよつとした寄り道として本筋と関係ないですが余談を次話として載せることにしました。余談なので、本筋と同じ日に載せていこうかと思いません。

余談「三代目ドアの悲劇」(前書き)

余談なので本筋とは余り関係はありません。ですが、二人の性格と
いうか性質というか、そんなものが窺える内容となっているはずで
す。

余談「三代目ドアの悲劇」

「ふう、疲れたな…。」

もうすぐ新学期に入るので去年の勉強の復習をしていた。

「ちよつと、休憩するかな。」

時間も3時ちよい過ぎの頃合いでいい感じにおやつ時間だ。

「よつと。」

椅子から立ち上がり1階のキッチン兼ダイニングへ行く。

「何かないかな？」

冷蔵庫を物色してみる。

「お！いいものがあるじゃないか。」

うーんと何々「こだわりの手作りプリン〜卵たっぷり使用〜」かなかなか上玉じゃないか。

プリンを持ってソファに座り、プラスチックの Spoon を用意する。

「じゃ、いただきまーす。」

ベリベリベリ〜。

「おお。ぷるぷるで且つこの甘い卵のおい。」

Spoon で掬すくってみるとぷるぷると揺れる。なんと魅力的な動きか。

「ん。」

おお、うまい。甘いぞ、そして舌触りが他のプリンと比べられんほどいい。

「これは…うまいな…。」

それから夢中になってプリンを食べる。気が付くと容器は空になっていた。

「ごちそうさま〜。」

久々にごちそうだったな。さて、もう少し休んでから、部屋に、も、ど、…る？

何か、すごいプレッシャーを右から感じる。なんだ、あ、足が勝手

に震えて…。

見ないといけない。けど、体が見ることを拒否している。でも、見ないと…。

出来の悪いロボットのよう^にに首を回して右を見ると…。

「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！！！！！！」

なんかゴゴゴゴゴゴ言ってる！？

目の前には髪を逆立て、すごい眼力で拳を握り締めている華琳がいた。

「あ、あ……の。」

ゴン！拳を壁にぶつける音。すごい怒ってます。

「ひい！！」「ごめ、ごめん、ごめんなさい！！」

に、逃げなきゃ！！

逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃ！！

何で怒っているか分らないけど、今のこいつには話を通じない。

とりあえず、少し落ち着くまで逃げなきゃ！！

とりあえず、距離を取る。相手は身長の高い華琳だ。リーチが違う。

間にソファを挟んで対峙する。

「……プリン。」

どうやら、華琳のプリンだったらしい。

「ごめん！あとで買いに行くから許して！！」

「……プリン。」

「1個とは言わない。3個、4個買ってくるから。」

「……プリン。」

だめだ、完全に極ま^きちまってる。こいつから逃げるにはどうしたら

「プリンッ！！！！」

「どわっ！！！！」

いきなり左腕が伸びてきて捕まりそうになる。十分距離を空けていたつもりだが、ここは攻撃範囲内らしい。

だが、今の攻撃は無理がある。おかげで華琳はバランスを崩した。

今ならいける！

俺は全力で部屋から出る。そして、左側にある玄関へ

シュツ！トスツ！…目の前をプラスチックスプーンが横切り壁に刺さる。

「プ！・リ！・ン！」

「ツ！！」

ただのプラスチックスプーンが凶器に変わる瞬間を目にして恐怖に駆られる。思わず尻もちをついてしまった。

玄関はだめだ。扉を開ける前に捕まりジ・エンドだ。距離を十分に空けてからどこかに隠れなくては…。

俺は後ろにある階段へと向かう。階段を一段飛ばしで駆け上がり、2階の自分の部屋へ走る。

バンツ！

部屋のドアを思い切り閉め鍵を掛ける。弾む呼吸を整え、ドアに耳を当て廊下の様子を窺う。^{うかが}

とっ…とっ…とっ…

静かに、着実に階段を上がってくる華琳。

「リ…プ…ン…ン…ンプリンプリン」

うわ言の様にプリンと眩きながら俺を探している。さながらホラーである。

「……………」

うわ言が聞こえなくなった…。なんだ、どこかに行ったのか？いや、楽観思考は危ない。今のあいつはいつものあいつじゃない。目的を達成するためにはどんなことだってする。

「ここは時間をおいて様子を見るしかないな。」

10分経った。相変わらず廊下から音はしない。もう、さすがに居ないだろう。居たとしてもさすがに話ぐらいは通じる筈だ。…通じるよね？

神経を集中させ音がならないように部屋の鍵を開ける。そして、少しドアを開け廊下の様子を

「プリン」

「ツツツツツ！！！！！！」

バンツ！ガチャツ！ドアを閉め、鍵を掛ける。

目が…目が合った、…あれは…話の通じる相手なのか…開口一言が「プリン」だ。正常じゃない。どれだけあのプリンのこと想ってるんだ。第一あれはもう妹じゃ

ゴツ！

「ひっ！」

ドアを叩いてる…。

ゴツ！ゴツ！ゴツ！ゴツ！ゴツ！

いや、そんな音じゃない。もっと重い音だ。きっと何か武器でも持ってるんじゃない。

バコツ！！！！！！

ドアから素手が出てきました。

「……………」

もうだめだ。ここも時機に陥落してしまっただろう。

バコツ！！！！！！

ほら、またひとつ穴が開いた。くそっ！何もできずにやられちゃうのかよ。

バキッ！！！！！！

下の方から足も覗いてきやがった。

バキッ！！！！！！

三代目ドア…済まない。お前が壊されていくのを俺は見ることにできない。

バキッバキッ！！！！！！

だが、俺は最後まで抵抗して見せよう。お前がやられた分だけ！俺は臨戦態勢を取りやつかりんの襲来に備える。

その瞬間、爆発のような衝撃を受けドアは木片となって部屋の中に飛んできた。

小さな木片が飛び、体に当たる。大きな木片を避け、前を見るともうすでに足が伸びていた。

まず、ローが左足に一発。膝が曲がる。そして、ボディに一発。丁度、肝臓あたり。体が前のめりに。最後に、左側頭部にハイキック。一瞬にして3発の攻撃を食らい完全にダウン。しかし、見えたのはハイキックだけであり、他の攻撃は木片か何か重いものが当たったとしか感じなかった。

気が付くとベッドで寝ていた。頭がグラグラする。体がギシギシ軋みを上げる。寝ながら部屋を見ると木片が飛び散ったままだった。ベッドに寝かせるだけの理性があるなら手加減してくれよ。そのあと、また頭がグラグラして寝てしまった。

後日、目撃者の親父の話によると「無言で道場に現れ、サンドバックを叩くだけ叩いたら帰っていった。」「らしい。」「鬼気迫るものがあった。」「と感想を述べている。

華琳はというと…

「
」

プリンを食べていた。冷蔵庫の奥に同じやつが一つあったらしい。とても機嫌が良さそうに見え、俺がプリンを食べたことも気にしてないらしいが…正直、怖いので同じのを4つ買ってきてやった。

余談「三代目ドアの悲劇」（後書き）

ドアの悲劇は書くのが楽しいですね

何と言うか、これぞコメディー！って感じでわくわくします。

小説を書く人はこんな楽しい気持ちになれるんですね。

でも、私はお仕事じゃないから楽しく書けるのかな？

本当はもっと辛いお仕事だったり…うん。

私は趣味の範囲内でもいいのかもしれないですね。

L e t · s 罰ゲーム (前書き)

夏休み初日です。L e t · s 罰ゲーム

Let's 罰ゲーム

幼い頃の華琳かりんが言う。

「勝負だ！お兄ちゃん！」

幼い頃の俺が答える。

「いいぜ！相手してやる！」

そう。あの頃はまだ互角に戦えるだけの実力差だった。

空から俺の部屋のドアが落ちてくる。

ドアから華琳の目が覗く。

「プリン」

高校生の俺が答える。

「待て！落ち着け！」

そう。今では華琳の方が捕食者側である。運動でもそして、勉強でも…。

華琳の腕が伸びてくる。

「やーやめ！やめてええええ！！！！！！」

うわああああ！！！！！！！！
ベッドから起き上がる。

「はあ、はあ、はあ……トラウマになってるじゃねえか！」

パジャマが汗でびっしょりと濡れている。時間はまだ7時だった。

「着替えてまた寝るか……。夏休みだし。」

パジャマを着替えて寝ることにする。

一応、訂正するがパジャマは俺の趣味じゃない。

華琳の趣味だ！無理やり着せてくるんだよ！

朝、違う服で見られると殴られるし、仕方ないんだ…。

パジャマを着替え終わりベッドに入る。

再び、深い眠りの中に落ちてゆく。

今度はよく眠れそうだ…。

バアアアアアンソーン！！

「朝だー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「うわああああ！ー！ー！ー！ー！ー！」

な、何が起きたんだ？

部屋の入口を見ると………四代目！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

「さあ、遊びに行く準備をするぞー！おー！」

「お前！よくも四代目を！」

「元気がないぞー！おー！」

「俺の話聞けー！」

「私の方の話聞けー！」

何なんだ……こいつ。理不尽すぎる！

「よーし！落ち着いたな！はい、じゃあ、これから涼をコーティン

グしまーす。」

何なんだよ！コーティングって!？

「ふっふっふ、実は昨日、夏休み用の涼の服を買って来たのだー！」

おお！以外に夏休みのこと考えてた！だが…

「昨日のうちに言えよ！」

「楽しみは取っておくものだ！弟よ！」

「うっ。」

いきなり弟かよ。結構胸にくるものが……。いつもなら「忘れてた

んだろ！」と突っ込むのに…。

「見よ！これだ！」

見せられたのは…短パンとTシャツと鍔付きの帽子。

「……………」

「短パン小僧セツト〜！」

どこかの青い狸のようにしゃべる。

キッ！

「おお、そんなに睨まないですよ。きつと、ばっちり似合うよ！」

ギンッ！

「お、さらに目つきがきつくなった。何、そんなに不満があると

？」

コク。

「なら！特別にこのブリー　待って〜逃げないで〜。」
付き合ってられるか！こんなの！

俺は部屋から出て1階に下りて行く。

今の時間は親父も母さんもとっくに起きてるだろう。こんな理不尽許せるか！直訴しに行つてやる。

「親父！いるか！」

「なんだ、涼。」

親父は新聞を読みながらコーヒーを飲んでた。ジョッキで…。

「聞いてくれよ！華琳のやつがふざけてやがる！あいつを止めてくれよ！」

親父は新聞を閉じてこつちを見る。

「ああ、華琳のことか。話は聞いている。」

え？話を聞いている？

「どういうことだ？話を聞いているって？」

話を聞きながらコーヒーを飲む親父。ジョッキで…。

「今日から弟なんだろう？華琳が姉で涼が弟。」

え？何で親父に話が届いているの？

母さんが台所から出てくる。

「お母さんも聞いたわ〜今日から弟なんですよ〜。」

母さんにまで話が届いている…。

「いいのかよ！？俺は華琳の兄だ！弟なんて通じるわけねえだろ！普通じゃねえよ！」

「いいんじゃないかしら〜十分通じるとおもっわよ〜私は〜。」

「別に困ることはないだろう？」

だめだ。ここで引き下がったら完全に認めてしまうことになる。

「困るよ！俺のプライドが傷つく！もう、学校に行けなくなる！」

いや、マジで学校行けなくなるよ？友達とかに見つかってみろ…
終わりだ。

「ごめんね〜、華琳ちゃんには貸しができちゃったのよ〜。」

「すまん、華琳には貸しがある。見逃すしかあるまい。」
「う、うそだろ…。」

思わず肩を落としてしまう。家族まで華琳の手中にあったとは…。
「ありがとね、お父さん、お母さん」

後ろを振り向くと短パン小僧セットを持った華琳がいた。

「さあ、行くよ！お・と・う・と・の涼！」

「うぐう…。」

信じていた両親の裏切りと心を折ってくる妹の言葉。

もう、勝手にしろよ…。

「今日はどんな友達の所に行くんだ？」

短パン小僧セットに身を包んだ涼が聞く。いや！もう、吹っ切れ
ました！

「うぐんと、奈津実なつみの所かな。」すぐ来い！今すぐ来い！弟を連れて
今すぐ来い！」って言うてたから。」

「なんだか不安なんだが、その友達。」

たった、一行の文で不安を煽るとはどんなやつなんだ…知りたく
ねえ。

「なあ、帰ってもいいか？俺の本能が危険だと言っている。」

「だめだよ！奈津実とは契約を交わしているんだから。来てくれな
いと私が危ないよ。」

何なんだよ！契約って！華琳が危ないって、俺だとどうなるかわ
からねえよ！

「はあ…本当にこの恰好かっこうで行くのかよ？」

「しょうがないよ。それも誤魔化ごまかすためだよ。」

「はあ…もう、嫌だよ。何なんだよ。家に帰りたいよ。」

「駄々こねないですよ。本当に小学生に見えるよ。」

「ああ、何でこんなことになっちまったんだよ。」

「涼がテストで負けたからでしょ？」

ああ！そつだよ！負けちまったからだよ！

「ほら、そんなところでうずくまってないで。もつすぐそこだよ。」
「はあ〜〜。」

ため息をつきながらついて行く。

「ほらほら、ここだよ！」

顔を上げると木造ではなくコンクリートで固められた近代的な家があった。

「こんにちはー！」

いや、インターホン右にあるじゃん。使えよ。

「きたー！かりーんいらっしやーい！弟君どこー！」

おそらく今の「きたー！」はカタカナが正しいかもしれない。

「やつほー。ここにいるのが弟の涼だ。」

「キヤー！かわいいー！小学生！？小学生だよね！？何年生かな？

4？5？6？4は流石にないか…じゃあ、5？6？」

怒涛とつとうのような喋りで、華琳が押されている。

「6年生だよ。」

「こ、こんにちは…。」

「照れてるのかな？お姉ちゃんの後ろに隠れちゃって可愛いわ〜。」

怖いんだよ！テンションおかしいだろ！何なんだこいつ！

「とりあえず、入って飲み物用意するから！」

「あ、ありがとー、ここに来るまで暑くてさー、助かるよー。」

華琳が奈津実の家へ入って行く。ここに入ったら日のある世界に戻ってこれるだろうか…とつつつつつても不安になる。

「どうしたの？」

華琳が不思議そうに聞いてくる。

「いざとなったら守ると約束してくれ。じゃないとここには入らない。」

「大丈夫だよー。奈津実はいいやつだよー。」

「怖いんだよ。あのテンション。どんな行動に出るか予想できないんだよ。」

「う〜ん。まあ、本当にやばいな〜と感じたら助けてあげるよ。そ

りやね。」

「本当だな？信じるからな？」

「どーんとまかせんしゃい！」

どーんと胸を打つ華琳。心配すぎる。

Let's 罰ゲーム (後書き)

余談「THE・密会！」

「つてなわけで、助けを求められたら助けるから。」

「ちつ、やるな涼君、華琳に助けを求めてから家に入るとは…。」

奈津実は親指を口に当てながら言う。

「でも、華琳？契約があるわ。だから、手を出さないで。」

「そうはいかないよ、一応大切な弟だからね。姉として本当に危ない時は助けないと。」

「なら、あなたがこれ以上はいけないと思う所で止めなさい。それくらいはいいでしょ？」

「あいあいさー。わかりましたー。」

こうして、涼の知らない所で密約は結ばれていく。

お友達イン・ザ・ハウス（前書き）

友達のお家へ遊びに行っている最中です。イン・ザ・ハウス！

お友達イン・ザ・ハウス

玄関をくぐると中は案外普通の家だった。なんか、変な構造かと思っていたので拍子抜けする。

「案外普通だな…。」

「何が？」

「いや、別に…。」

独り言に華琳が反応する。

「上がって上がって、部屋に案内するから。…あ。」

奈津実は急に立ち止まって棒立ちになる。

「ん？どうしたの奈津実？」

「あのね…ごみよごみよ…というわけで、ちょっとその部屋で待っておいでね。」

何やら華琳に耳打ちして話を進める奈津実と華琳。奈津実は部屋を教えてどこかに行ってしまった。あくまで、招かれているのは華琳であって俺ではない。話も華琳から通すのが普通だろう。

「なんて言われたの？」

一応、弟を意識しながら語調を変えて聞く。

実は家を出る前に紙を渡された。華琳がイメージする弟を演出するように要求されたのだ。

「なんか、同人誌がどうのこうのと言ってた気がする。」

「何だよそれ。同人誌って…やはり、やつはそっち系なのだろうか

…。

そんなことを考えていると一人の少年が出てきた。小学生だろうか？

「姉さんに言われてきました。応接間まで案内します。」

すっかりとしたもの言いで喋る少年。少年は先を歩いて部屋に案内する。ふと、疑問に思ったので聞いてみる。

「ねえ、ここの苗字ってなに？」

「塩田です。」

華琳に向かって聞いたのだが、後ろ向きに塩田弟が答える。

「どうぞ、ここが応接間です。飲み物を持ってきますので中でくつろいで待っていてください。」

場所が場所なら会社の社長秘書と間違われてもおかしくない程、対応が丁寧な塩田弟。

「あ、どうもありがと。」

去っていく塩田弟を見送る華琳。

「すっかりとした弟君だな。」

華琳と二人きりなので口調は元に戻す。

「そうだね。すっかりしてるね。」

「華琳もあれくらいしっかりしてればいいんだけど…。」

「無理じゃないかな。あはは。」

本人の前で言っているんだが！だが！まったくこたえない！自分でもしっかりしていないと認識しながら直す気は全くないのか…まあ、華琳らしいと言えばそうなんだが。

「それより、さっきの口調よかったからもう一回やってよ。」

「嫌だ。あんな言葉遣い、小学生でも普通しねえよ。」

「え、でも可愛かったよ？」

「可愛い言うな！」

これでも結構、胸抉られてるんだからな！初対面の女の子から小学生と間違われるし…可愛いとかわれたし…。

「飲み物をお持ちしました。麦茶でよかったですか？」

塩田弟が帰ってきて少し戸惑う。さっきの話きかれてないだろうな？口調とか戻ってたし。

「うんうん。贅沢言わないよ。麦茶さいこー。」

華琳がガブガブと麦茶を飲む。俺も麦茶に口をつける。うん。冷たくておいしい。

しかし、塩田弟がさっきからこっちを凝視している。

「あ、あの…なにか？」

もしかして、やっぱり気づいちゃう？なんか雰囲気が違うとかで

…普通気付くよね。やっぱり流れでる高校生オーラは覆い切れないよね。気付かれて少し嬉しいぜ！きつとピンチなんだろうけど嬉しい！

「いえ…弟さん少し二人で話をしませんか？」

俺は華琳を見る。なんか、やばいんじゃないですか？二人で話したかはNGじゃないでしょうか？

「いいんじゃない？同じ小学生同士、話してきたら？」

いやいやいやいや、二人でとかやばいでしょ！？ねえ？ばれるでしょ？考えてもの言ってます？

華琳は不安そうな俺の顔を見て…ピツ！と親指を立てる。いやいや、こいつわかってねえ！

「じゃあ、少しの間お姉さんはここでお待ちください。」

「はい。わかりました！。お二人さんごゆっくり！。」

くそ、どうなっても知らねえからな！

俺は塩田弟について行き、部屋を出る。

廊下に出て少し歩く。ある程度部屋から離れてこちらを振り向いた。

「ふう、ここらでいいかな…。」

口調が変わっている…。少し面食らっている俺にかまわず話をする塩田弟。

「お前、気をつけるよ。」

「え？何に？」

がんばって弟な感じを出す。

「何につて姉貴にきまってるだろ。あんな獣の前にそんな恰好で出たんだ。覚悟は出来てるんだろうな？」

あ…やっぱり。しかし、知らないふりをする。

「この恰好そんなにおかしいかな？」

「うん。おかしくはないんだが、姉貴の前ではやめた方がいいな。」

「でも、これお姉ちゃんがつけるって言ってきたし…。」

「まさか…！あの姉ちゃんも姉貴側の人間なのか！」

信じられないといったような顔である。実際は小学生に化けるために来てる服だけだね。…そうだよな？

「お姉ちゃん達に何かあるの？」

一応聞いてみる。

「いや、お前は知らない方がいい。いや、待てよ。知っていた方がいいのか？」

なんか、親身になって助けようとしてくれる塩田弟。

「とりあえず、うちの姉貴と二人つきりになるな。そして、一人にもなるな。必ずお前の姉ちゃんと一緒にいる。それが一番だ。」

わかつてるよ。俺だって食い物にされたくないからな。

「わかった。なんかかわかんないけど、気を付けておく。」

「ああ、がんばれよ。じゃあ、戻るか。」

さて、一つ突っ込み忘れたから今言わせてくれ。ばれてねえ！高校生オーラどこいった！おい！しかも、塩田弟の口調、頼りになりそうな兄貴みたいな口調になってるぞ！そこまで俺は弱い存在に見えるか！ということだよ！一頻り心の中で突っ込んだあと、応接間にもどる。

応接間に戻ると華琳と奈津実がいた。二人で話していたらしい。

「あ、戻ってきた！じゃあ、さっそく私の部屋に案内するよ。」

そう言っただち上がる奈津実。

「弟君も来る？」

華琳が塩田弟に聞く。

「いえ、遠慮させてもらいます。三人で楽しんでください。」

口調が戻っていた。

「そっか、じゃあ！涼いこ！」

華琳に手を引かれていく。

塩田弟はこつちを向いて目で「がんばれ」と言っていた。いいやつだ。

廊下を進んで奈津実の部屋に行く。

「ここだよ、入って。」

部屋に入ると…ツイスターゲームが準備されていた。なんだ？パーティーでもする気が？

「わー！これってついすたーげーむってやつだよな？私やったことないんだ！」

華琳が嬉しそうに声を上げる。そういえば、俺のやったことがない。

「前に華琳と話したときやったことないって言ってたから準備してみたんだ。やる？」

なかなか友達思いのいいやつだった。

「え？いいの？やるやる！」

「弟君もやるうー！」

最初からこの展開を狙っていたな…これは畏だ。ここは無難に断つておこう。

「え、僕はこういうの苦手だから…」

「大丈夫、お姉さん達が手取り足取り教えてあげるから。」

キラーン　って目がギラギラしてるよ？しかも、明るい星って感じじゃなくてダークな感じだよ？

「え…でも…」

「いいじゃん。やるうよ涼。折角なんだし。それに…」

華琳が耳打ちをする。

「手と足取られるだけならまだましな方だと思っよ？」

…肉を切らせて骨を断つ…か。

「だから、一緒にやる！涼！」

「うん…わかった。お姉ちゃん達と一緒にやる！」

「シャ！」

拳を握りしめガッツポーズをする人一名。判断を誤ったか…。

「じゃあ、誰から始めようか。」

「はいはいはい！」

手を上げて跳ねる華琳。

「じゃあ、華琳と…」

こつちを見る。笑っているけど、その笑いが怖い。

「弟の涼君ね。」

「はい…。」

とりあえず、一番怖いやつと一緒にならなかったので少し安心した。でも、相手は華琳だ…。

「よーし！やるぞー！」

拳を突き出したり軽くジャンプしたりフットワークしたりと準備運動している。誰と戦う気だ…。奈津実の方は…

「うふ、うふふふ…。」

気持ち悪く笑いながらカメラをいじっている。すごい身の危険を感じる。なぜ、ただツイスターゲームをするだけで、こんなにも不安になってしまふのだろうか…。

「そうだ！私、悟わくと呼んでくるね。」

奈津実はバダバタと部屋から出て行ってしまった。

「悟って誰だ？」

華琳に聞いてみる。

「たぶん弟君じゃないかな？」

塩田弟の下の名前悟なのか。

しばらくして奈津実と塩田弟が戻ってくる。

「悟にはルーレットを回す役をやってもらいます。」

ルーレットを塩田弟に渡す。

「姉さんは何をされるんですか？」

相変わらず丁寧な口調だ。

「この記念すべき日を後世に残すため撮影を行う！」

胸を張ってカメラを持つ。絶対、趣味のためだけだろう。そんな姉を見て塩田弟は諦めたような顔をする。

「ってことで、準備はいいか！皆の者！」

「おー！…！」

「おー…。」

「 1010 」

お友達イン・ザ・ハウス（後書き）

タイトルは「私は友達の家にあります。」を華琳が英語に直したものです。「お友達イン・ザ・ハウス」何を言いたいかはわかる。でも、ペケです。

余談「弟養成プログラム」(前書き)

いつもの余談です。なんですが、文字数が多くなったがので後書きを飛び出しました。お楽しみください。

余談「弟養成プログラム」

「はい。これ見て。」

一枚の紙を手渡される。

「なんだよ。これ。」

「まあまあ、読んでみなよ。」

納得はいかないがとりあえず読んでみる。

弟養成プログラム ミ

君もこれで理想の弟になれる！

？女性にあつたらとりあえず「お姉ちゃん」と呼ぶ。（お姉ちゃんと言えない、恥ずかしがり屋さんはお姉さんと呼ぶのも可。）

？身長が低いならGOOD！上目遣いで可愛く喋ろう！（相手が自分より身長が低くても頑張つて上目遣い！）

？人前で決して本性を晒さない。（少年よ！常に猫を被るのだ！byくらーく）

？頭の中で一人のか弱い少年を思い浮かべその少年と自分を重ねよ！（高等テクニクだ！頑張つて使いこなせ！）

？明らかに年下の人がいても自分の少年を演じ切れ！（プライド？そんなもの捨てちまえ！）

？お姉ちゃん達の言うことは素直に聞く。（断りたい時ははっきりと言わず、言いよどむなどの遠回りな表現をする。）

？出来る事があつても周りのお姉ちゃん達に助けを求めてみる。（自分では何もできないというか弱さをアピールするのだ！ベターな失敗も可。）

以上。弟養成プログラム七ヶ条。これらを守ればきつと君も素敵な弟になれる！

「どう？どう？私が考えたんだよ？すごいでしょ！」

うん。なんか、俺の妹ってこんなやつだったけ？

「うん…まあ…よく考えたな…。」

「そうでしょ、そうでしょ。」

腰に手をあて胸を張る華琳。いや、誇れることなのかこれ。

「で、まだ時間あるし、さっそくだけど練習開始！」

「なっ！ちよつと待てよ！へぶっ！」

いきなり殴られた。

「私が弟じゃないと思ったら殴るから気を付けてね。」

最初に言えよ！

「…。」

「…。」

「…。」

「…。」

「…。」

「何か喋ってよ！」

理不尽だ！

「何かって何だよ。いてっ！」

でこピンを食らう。

「言葉遣いが乱暴。」

「じゃあ、何かって何ですか？うっ。」

頭に軽くチヨップを食らう。

「丁寧過ぎる。もっと、なんて言うか…未熟者！って感じで。」

「何かって何？」

「うん。そんな感じ。あとは…上目遣いでやってみて。」

「何かって何？」

首を傾げて言われた通り上目遣いで聞いてみる。

「はう！」

胸を押さえて悶える華琳。馬鹿か。

「はあ、はあ。じゃあ、さっきの感じで「お姉ちゃん」って呼んで

みようか。」

危ないおじさんみたいな感じになってきている。でも、逆らえないので素直に従う。

「お、おねえ…ちゃん？」

「うおおおおおおおおお！……！！！！！！」

華琳が吹き飛ぶ。馬鹿だ。いや…待てよ…。

「お姉ちゃん…大丈夫？」

首を傾げて心配そうに聞いてみる。

「どわあああああああ！！！！！！！！」

華琳がまた吹き飛ぶ。やっぱり馬鹿だ。だが…これは使える！

「はあ、はあ…もういいよ。もう、弟やらなくてもいいよ。」

息が荒い華琳が言う。これまで幾度となく戦闘を繰り返してきたがここまで息が荒くなることはなかった。

「華琳。お前は大変なものを呼び覚まさせてしまったな。」

「何を言っているの。大変なものって…まさか！」

「ふっ！とどめだ華琳！悶え死ぬがいい！」

俺は渾身の笑顔と上目使い、口調で華琳に突っ込む。

「お姉ちゃん！」

ぼふっ。華琳に抱きつく。

「……………」。

ん？

反応がない。

普通なら

「うおおおおおおおおお！……！！！！！！」

とか

「どわあああああああ！！！！！！！！！！」

とか言うはず。

だが、反応がない。

体が震えているのはわかるがそれ以外の反応がない。

「あ…あは…は…」

やっと、反応があったが…嫌な予感がとてもするのでそっと離れ

ガブツ。
ガブツ。
ガブツ。
ガブツ。
ガブツ。

「ぎゃあああ！！！！！！いつつ！！いつつ！！いたい！！いたい！！痛いって言うてるだろ！！いつつ！！」

肩から首にかけてをありったけ噛まれる。

カプツ。

カプツ。

カプツ。

ん？噛む力が急激に弱まってきたぞ。

カプツ。

カプツ。

カプツ。

「へ、へへへっ……。あーん。」

カプツ。

「なあ、おい。」

ギクッ！

「お前、今普通の状態だろ。」

完全に目を逸らす華琳。

「まず、噛むのをやめる。そして、離れる。」

噛んでいる口を外し、そして離れる。

「あー。いってえ。」

文句を言いながら立ち上がる。

「ごめんなさい…怒ってる？」

床に座ったまま、本当に申し訳なさそうな顔で謝る。そんな顔さ
れちゃ怒る気もなくなる。

「少しはな、でも俺も悪かった。だからお相子だろ。」

色々傷を負ったことを考えるとお相子ではないがそういうことにしておく。

「ありがとう…お兄ちゃん。」

うっ。なんだかむずがゆい。いつも呼び捨てなのに「ごうごう時にお兄ちゃんなんて呼ぶなよ。」

「と、とりあえず、今後は気をつけるように!」

「…はい。」

「まだ、元気ないな。怒ってないって言ってるだろ。」

「うん、わかってるよ。…ちょっと顔洗ってくるね。」

「ああ、行ってこい。」

「はあ、やっちゃったな。」

また、涼を怒らせてしまった。

「でも、涼もいけないんだよ。」

そうだ、あんなことするから暴走するんだ。こっちの身にもなつてほしいよ。

バシヤツ!

顔を水で洗う。目の前には鏡に映った私がいる。

「あなたは何がしたいの?」

返事はない。本当に何がしたいのかな。

「はあ…。」

思わずため息をつく。考えても結論はでない。結論なんてないのかもしれない。そもそも、そんな難しいこと考えない。今が楽しければいいのだと思う。だから、失敗もある。そこは諦めよう。

「よしっ!」

今はいつもの自分を涼に見せることが一番だ。笑顔笑顔。

「いいんじゃないかな?」

元気も戻ってきた。

「それじゃ、行きますか。」

今は涼と一緒に遊べればいい。それだけで十分楽しい。

「へっへー。もどつてきたよー。」

元氣は戻ったみたいだ。

「そうそう、元氣ないと華琳じゃないな。」

「そうかな？そうだね！じゃあ、ご飯食べて友達の家遊びに行くぞー！」

「あ…。」

そのことがあったあああああ！！！！！！！！！！

余談「弟養成プログラム」(後書き)

途中絶対的にエロ方向に傾きました。もう、どうやってKENZENな方向にコメディイな方向に向かせるか悩みました。どうにか無理やりコメディイな感じにまとめました。ふと気付くと時計の針は朝の4時を指していました。眠い。

奈津実break涼(前書き)

タイトルどおりbreakされました。ポッコポコです。(精神的に)

奈津実break涼

「うぐつ。」

なかなかきついぞツイスターゲーム。

「次は左足を赤に。」

いや〜無理だろ〜。これ。一気に端から端に移動は無理だ。

「ほらほら、どうしたんだ〜い。」

華琳は余裕で左足を赤色に付けている。体が柔らかいことからの余裕か、俺を挑発してくる。

「くつ。」

パシヤ！パシヤ！

「うふふ。いいわこのアングル。」

身体的にも精神的にもこっちは結構限界が近い。しかし、

「いいぜ、やってやるぜ。」

挑発に乗って最後の力を振り絞り、左足を赤につけようと試みる。

「だあああああ！！！！！！」

ピキッ。

「ぎゃあああああ！！！！」

こ、股関節が、ピキッっていった。ピキッて。

「ああ、無理しちゃって。」

「いいわ。痛みを転げまわる涼君いいわ。」

パシヤ！パシヤ！

痛みを苦しんでいるのに喜びながらシャッターを切るなんて。こいつには慈悲とか血とか涙とか諸々が足りない。

「では華琳さんの勝ちと言うことで。」

「やったー！」

初めから勝てるわけねえだろ！出来レースじゃねえか！

不貞腐れていると華琳が耳打ちしてくる。

「気付いてなさそうだから言うけどゲームに熱中し過ぎて口調戻っ

てるよ。」

「あ、ごめん。」

気付かなかった。危ない、危ない。むきになって素が出てしまった。こんなことでばれてしまったらどんなことになるか…。(主に華琳の怒りによる被害)

「これからは気をつけるよ。」

こちらとしては、これからはない方がいいんだけどな。

「あーあ、お姉ちゃんに負けちゃったよ。」

さっきまでいつも通りの口調で話していたので誤魔化すためにわざと大の字に倒れてオーバーにリアクションする。

「キヤー！」

パシヤ！パシヤ！

こいつは…もう、気にしないでおこつ。

「じゃあ、次は奈津実やろうよ！」

華琳が提案する。

「えー。」

露骨に嫌な声を上げる奈津実。

「やるとしても華琳とはいやよ。」

「え、何で？」

「華琳に勝てるわけないじゃない。やるとしたら涼君とね。」

そうそう、華琳と勝負なんてだれもしないよな。でも、華琳の代わり俺かよ。

「しかたないなあ。じゃあ、私は奈津実の代わりに撮影するね。」

えっ！？なんか勝手にもう一回やることになってる！？俺にはまだ痛みが…。

「ああ、それはだめ。華琳機械だめじゃん。使い方わからなかったら切れて壊すじゃん。」

そう、華琳に複雑なものを渡してはならない。機械なら切れて壊す。パズルは無理やりはめて変な絵が出来る。知恵の輪は引きちぎって解けたことにする。これによってどれだけの謎が葬られたこと

か…。

「だから、華琳はおとなしく見学。おけー？」

「…はい。」

少し恨めしそうに奈津実を見る華琳。

「じゃあ、やるうか涼君。」

俺の話を聞いてもらえる気がしない。

「はい…。」

そういえば、いつから呼び名が「弟君」から「涼君」になったのだろうか。友達の呼び方とか知らない間に変わるよね。

頭の中の話は変えられても現実の話は変わらない。

「では、初めのルーレットを回します。…初めは黄色に左足です。」

「よし、初めは簡単だね。」

ちよっと、元の口調になりかける。左足を黄色につける。するとすぐ目の前に誰かの左足が置かれる。

「ん？」

前を見ると奈津実がはあはあしながら目の前に立っていた。

「ひい！」

「ど、どうしたんだい？涼君、はあはあ。」

「な、なんでこんなに近い位置にいるんですか！？」

突然のことで敬語になってしまう。

「しょうがないじゃない。涼君に直接触れるにはこの位置しか…おっと、間違った。」

怖いよー。どこ触れるかわかったもんじゃない。

「さっきの間違え、うーんっと…そう！勝負を早く決めるには相手の邪魔した方が早く終わるじゃない。相手が動きにくい場所の取り方をしていけば相手はすぐに負けるはずよ。」

たった今考えたにはよく出来ている。でも、こういうやり方はいいいのか？ルールよくわからないからな。まあ、とりあえず…

「すごい！奈津実お姉ちゃん頭いいね！」

と言っておこう。

「かわいい！」

そう言って抱きついてくるが、避ける。

「ちえー。」

残念そうな顔をしているが断じて触れさせない。一つ許し始めた
ら何をするか…。

「次、行きます。…次は、緑に右手です。」

「はい！」

奈津実がさかさず俺のいちばん近い緑に右手をつける。元から端
の方に立っていたので奈津実と交差するしか緑を取る方法がない。

「さあ！さあ！緑に！右手を！つけるんだ！！！」

奈津実さん。目が怖いです。

「くつ。」

出来るだけ奈津実に触れないように緑に右手をつける。

「そんな風に無理してる涼君も可愛いわ〜。」

そんなことを言ったあと舌舐めずりをする。怖いよー。

「次は左手を黄色に。」

「はい！」

またしても奈津実が素早く俺の近くの黄色を取る。

「また…。」

「ごめんね。これも触れ…勝つためなの。わかって。」

絶対、わかってやるものか！しかし、次は体ごと交差しないとい
けない。

「う〜ん。届かないよ〜。これは僕のみ」

「まだよ！頑張れば届くわ！」

負けを宣言しようとするが、必死に説得される。

「でも、そうになると、奈津実お姉ちゃんの上に乗っちゃうことだ…。」

「

「かまわないわ！むしろ乗って！」

「…う、うん。」

一瞬引いてしまった。そこまで、触れたいのか。

「じゃあ、奈津実お姉ちゃん乗るよ」

「あ、無理。」

少し力を入れたところで奈津実がバランスを崩す。

「え！？うわー！」

まさか！これは罠だったのか！体勢的には押し倒す形になってしまった。

「結構、だ・い・た・ん、なのね涼君。このままお姉さんと二人きりになれる場所に行っちゃおう？」

手がふにふにしたものに触れている。：胸だー！

「あ、ご、ごめんなさい。気付かなくて、あと、お、お断りします！」

飛びのいて離れる。気が動転して言葉に詰まってしまっていた。

「いいのよ！涼君になら何されても気にしないんだから！」

今度は気が動転しているのに便乗して、抱きつかれ押し倒されてしまう。

「いや、いいよ。いいから、離れて。え、どこ触ってるの！？え、やめて！お姉ちゃん助けて！」

必死にもがいてみるのががちりと捕まってしまった。助けて華琳！ヘルプミー！

「満更でもないって顔しているよ？」

ノー！！違うから！そんなことないから！服の下から手とか入ってきて肌さわりまくられてるし！

「早く助けて！本当に襲われてる！いやー！」

「りよ、涼君の肌…はあ、はあ、すべすべだ…いいいわ。」

「全く、仕方ないな。ほらほら、可愛いのはわかるけどいい加減にしてよね。」

俺から奈津実を引きはがす。

「た、助かった…。」

「ちえ、これだけじゃ満足できないわ。」

「一応、私の弟だし私の前くらいでは我慢してよね。」

まさか、どさくさにまぎれて服の中に手を入れてくるなんて…。

「結局、初めに倒れたの私だから私の負けね。まあ、それ以上の収穫はあったからいつか。」

「うう…。」

「触られた〜。あれはもう変態だよ〜。変態女に触られた〜。」

横に華琳が寄ってくる。

「まあ、あれだよ。天災だと思っただけ諦めなよ。」

「理不尽だよ〜。」

「うん。わかったよ。天災じゃしかたないよね。」

奈津実のことは天災であるとして諦めよう。

実はさつきからトイレに行きたかったんだよね。切りがいいからここらで一旦抜けようかな。

「僕、トイレ行ってくるね。」

「行ってらっしゃーい。」

華琳が答える。

「私もついて行くのか？トイレの場所わからないだろうし。」

「自然な感じで行こうと奈津実が聞いてくる。」

「いいです。トイレの場所だけ教えてくれれば。」

「しっかり断る。トイレの場所だけ教えてくれればいい。」

「そこまで警戒しなくてもいいのに…。」

「あんたはそこまで警戒されるほどのことをしたんだよ！」

「ここ出て左行って突き当りを左に行つて突き当たった場所がトイレだよ。」

「ありがとう。」

そう言つて奈津実の部屋を出てトイレへ向かう。

トイレで用を済ませていると、ガチャガチャ。誰かがドアのぶをいじっているようだ。

「入ってますよー。」

「えっ！？涼君まだ入ってるの？早く出てよー。」
奈津実さんのようです。

「待ってください。もう終わりますから。」
「はやくして〜。」

いかにももう漏れる〜って感じの声が聞こえてくる。
ガチャリ。

「もう、いいですよー。」

そう言いながら出ようとするが、
「うわっ！」

トイレに押し戻される。

「へっへへ〜、もう出られないよ〜。」
カチャ。

鍵が閉められる音がする。トイレに閉じ込められた！奈津実と！

「何言ってるんだよ！出してよ！お姉　　うむ！」
いきなりキスされる。

「んー！！！」

ギヤーシ、シタガー！！！！

奈津実との間に手を入れて突き放す。

「い、いきなり何するんだよ！」

「お姉ちゃん呼ばれると困っちゃうんだよね〜。」

奈津実は臆することなくズンズン近づいてくる。

「う、こ、こないで。」

「いいじゃない。痛くはしないわよ、それに…もう、我慢できないわ！」

奈津実が襲ってくる。

「ま、待って落ち着いて！奈津実お姉ちゃん落ち着いて！」
「無理よ！」

追い詰められ、奈津実の魔の手が伸びてくる。

「た、助け、助けて！お、お姉ちゃん！」

手が、手が服の中に！っていうか、服脱がされる！

「へっへへ、観念しなさい！」

「うわー！やめ、やめて！服脱がさないで！助けて！お姉ちゃ、華琳お姉ちゃん！」

待って、下は脱がせようとしないで！下はだめー！

「下はだめ！だめだから！だめって言うてるよ！」

「よいではないか〜！」

どっかの悪代官のような台詞を吐く奈津実。いや、もう悪魔です。

「誰か助けてよ…、お姉ちゃん…。」

恐怖とか不安で泣きそうになる。

ガチャガチャ！パンツ！

「涼をいじめるのは誰だ〜！」

「ふぎゅっ〜！」

華琳が現れ奈津実に一発チヨップを入れて引きはがしてくれる。

「お、お姉ちゃん！お姉ちゃん！」

あまりの恐怖に幼児退行してしまい、華琳に泣きつく。

「ひっく…怖かったよー…お姉…ちゃん。本当に…ひっく…怖かったよー。」

「おーよしよし、怖かったねー。」

本当のお姉さんのように慰める華琳。

「ほら、奈津実、謝って。」

「う、ご、ごめんなさい。もう、しません。」

「ほら、奈津実お姉ちゃんも謝ってるから泣かないで。」

「うん…。」

ようやく少し落ち着いて華琳から離れる。

「いや、ほんとにごめんね。泣かせるまでやるつもりはなかったんだけど…。」

バツが悪そうに眼をそらして言う奈津実。

「本気で襲ったでしょ。そりゃ怖くて泣くよ。」

「ほんとにごめん〜！」

こっちに向かって手をパンツ！と合わせて謝る。

「もういいよ。奈津実お姉ちゃん一杯謝ってるから。」

「なんか、もう、いいよ。天災だもん。諦めるよ。」

「ほんとに？じゃあ…仲直りしましょ。」

「そう言っつて奈津実が手を出す。」

「うん。仲直り！」

「そう言っつて手を握ろうとするが、」

「あれ…？」

手が震えて、それに変な汗一杯出てきた。本能が握手することを拒否している。

「うーん。完全に恐怖対象になつてるね奈津実。」

華琳がそう言っつ。

「えー！そこまで！仲直りするつて言っつてるのに？」

「きつと、本能に焼きついたんだよ。」こいつにや触れちゃいけね

え…。」つて

「…ごめんなさい。」

「いやいや、涼は謝らなくてもいいと思うよ。仕方ないよ。」

「まさか、ここまで嫌われるなんて…少しへこむわ。」

「そう言っつて、奈津実はどこかに行つてしまった。」

「じゃあ、もどろつか涼。」

「奈津実お姉ちゃんほつておいていいの？」

「大丈夫だよ。あれくらいでめげないから。」

「逆にあれだけ嫌われてもめげないのか…。」

部屋に戻ると奈津実が飲み物やお菓子を用意していた。

「とりあえず、出来ることはこれぐらいね。がんばつて壁を取り除かないと！」

「さあ！飲み物とお菓子準備したから食べて！」

奈津実がこつちを向いて言っつ。

反射的に華琳の後ろに隠れてしまっつ。

「姉さん何したんですか…。」

「ちょっと…ね。色々あったのよ…。」

色々ありました。はい。

「涼。奈津実はもう何もしないから大丈夫だよ。ほら、一緒にお菓子食べよ。」

「うん…。」

その後、お菓子を食べたりしながら両名の壁を薄くすることに成功しました。

奈津実break涼（後書き）

そう、私はこれが書きたかっただけなんだ。

完全に弟状態になって華琳に泣きつく涼が書きたかったんだ。

とりあえず、満足。大体の目標は達成した感じだ。

しかし、お話はまだまだ続きます。

キャラ設定ですよっと。(前書き)

前々からキャラ設定出したかったんですけどよね。

お話の内容だけじゃどうも伝わらないことが多々ありますし。

まあ、補足という形で考えてください。

でも、勝手に変更されることもあるかもしれない。

キャラ設定ですよっ。

余談です。前々からキャラの説明というか設定というかそういうのをしたいな〜と思っていたので、ここに書かせてもらえたらと思っています。

前書きみたいなものも書いてみたりしてはいたんですが、内容が予想できたりしたのでネタバレになっちゃうかな〜と思ったりして載せていませんでしたが、結構進んできたしここに載せてもいいかな〜と思ったりしてきたので、載せます。

主人公・涼は高校生でございます。涼君は妹様とある約束を交わしておりました。

それは、蝉が鳴きだし始め初夏に入る頃でした。「テストの点数が上だった方の言うことを何でも一つだけ聞く。」ということでした。そして、運命のテスト返却日…それは現実となりました。妹様が涼君の点数を1点上回りました…。

その結果、妹様の要望により涼君は弟に、妹様は姉へ…。この約束は夏休み期間中のみ有効ということだそうです。

夏休みの間、妹様は涼君を引っ張り回し妹様のご友人の所へ自慢しに行く毎日。

そして、妹様のご友人という新しいお姉様方との出会い。広がる面識ボロボロな演技。数々の苦難が姉弟を襲う！

（この時の涼君は弟である。その結果、年は下でもお姉さん扱いしなけれならず、年下として振舞わなければいけない。）

さらには、なぜこのような願いを妹様が願ったのか…その真相は主人公である涼君の過去にあった！

終わってみればただの姉弟演技。だが、それは二人の間に深い絆を生むのである事を二人はまだ知らない…。

って感じで行こうかな〜と思ったり思わなかったり。

今まで登場した人物の説明。

主人公・橘 たちばな 涼 りょう 性格：よくよく行動を観察するとツンデレだったりする。

偏差値はそこらの高校と比べ物にならない進学校であるエリート国立高校へ通う男の子。

両親は道場を開いている。しかし、本人は運動はまったくの不得手中の下程度。

その代わりに頭を働かせた結果エリート国立高校へと入学できた。父は180cmを超える長身。母も女性としては長身の160cmをゆうに超える。妹は174cm弱の身長がある。

しかし、本人は160cmしかない。正確には159.3cmである。

その結果、周囲からは華琳が姉、涼が弟に間違われることが頻繁にある。

結果、妹が姉。主人公が弟という形が当然のように成立し夏休み期間中のドタバタへと流れ込む。

趣味は暗算という名の通り暗い趣味を持っている。暇つぶしに車のナンバーを四則演算してしまう。

もつといい暇のつぶし方はないのか…。妹のことは案外大切にしている。

妹様・橘 たちばな 華琳 かりん 性格：元気はつらつオラナミンC

残念ながら兄程の頭はなかった妹様。高校も県立私普通高校へ…だが、頭が悪いわけではない！兄が異常なのだ！

道場を開いている両親の元に生まれる。その遺伝子を遺憾なく受け継ぎ身長は174cm程に上る。

スポーツも全国大会に出る程である高校では有名人である。頭も悪

いわけじゃないので人気もある。
だが、人気があるのは何故か女の子だけである。（「何故か」と思っているのは本人だけである。）
男の子に人気があってもいいものであるが、お兄ちゃんっ子なのが皆に知れているのでしかたないのである。
本人の話の端々には兄が絡んでいる。男の見定めも兄が基準である。さらに、自分がスポーツができるのでスポーツができる男がどうということはない。対象外である。

一応、ここで説明をさせていただきます。この二人まだ書いていない設定があります。

物語りのネタバレになるので書いてはけません。でも、人によってはこの設定いらんじゃない？など思うかも知れません。

しかし！その設定がなければ今回の夏休みの騒動は起こらなかったのです！なので、まあ、諦めてねとしか言えません。
でも、どんな設定を書いていないのかもわからないのに、諦めてねと言われてもどうともいえませんよね。

父・親父、お父さん。呼び方は人によって違う。性格：寡黙であるがちよつとずれてる。

道場を開いている。空手、柔道を専門に護身術を教えている。まだまだ、現役。

華琳より強いよ！娘に負けるようでは一家の大黒柱が勤まらないからね！朝のコーヒーはジョッキで飲みます。

何か意味があるわけではない。ただ量が入るだけという理由でジョッキ。

少しずれている。でも、いい人。

母・母さん、お母さん。呼び方は人によって違う。性格：物腰は柔らかなくふわふわしている。

道場を開いている。合気道を専門に護身術を教えている。まだまだ、現役。華琳より強い？

娘と組み手をしても投げたり受け流したり、自分からは仕掛けない。父とも投げたり受け流したり、積極的には攻撃しない。

つかみどころがないのである。！性格もふわふわとして漂っている感じである。朝は早い。

みんなおきるのが早いから朝食を作るのも自然と早めになっている。基本的にいい人。でも、結構いい加減。

父、母は即興で作りました。こんな感じの両親は面白いと思います。

華琳の友達 A・塩田しおた 奈津実なつみ性格：趣味はあれだけど結構真面目。

華琳の友達 A です。頭は凄くいいです。なぜ普通高校にいるのか…。華琳の英語を克服させるため尽力したのもこの人。

しかし、ただでは教えない。何か見返りを華琳に求めます。その結果、涼君がいけにえに…。

華琳との接点は趣味で気があったからです。華琳は奈津実ほどではありませんがシヨタコンです。奈津実は筋金入りです。

実は名前もそこから取りました。シヨタ しよた しおた 塩田！
って感じです。主人公の涼は獲物としてみています。

THE・EMONO。狙っています。端々にオタク臭を醸し出します。写真撮ってたけど何に使うんだろう…。

まさか、某掲示板でシヨタの画像アップしろとかで画像載せてたり…。ですが、そんなことはしません。真面目ちゃんなので自宅観賞用や資料として使うのが妥当な線かと思われれます。

弟君はいつからか奈津実に対して敬語を使うようになってしまいました。きつと、見てはいけけないものをたくさん見てきたに違いない。ってことで、涼君は狙われています。

華琳の友達 A の弟・塩田しおた 悟性格わい：お節介やきで心配性。でもあま

り表にださない。

華琳の友達Aの弟です。姉の趣味のせいで年上のお姉さん方と話す場合敬語になってしまいます。

友達や同年代の子とは普通にため口で話します。そのギャップに驚かれることもしばしば。主人公の理解者でもあり、協力者でもありません。

同じ姉を持つ者通し仲良くしたいと思っている。主人公には兄貴風を吹かせております。頼もしい限りです。

ですが、いざって時は高みの見物。実力は皆無。自分に被害が出ないよう最大限努力します。

姉の趣味はもう諦めています。あれはあれで姉なのだと受け入れています。

でも、少しでも直ってくれるならうれしいと思っているのもまた事実。がんばってね。

つてことで、涼君のよき理解者です。

今のところ登場しているのはこんなところでしょうか。まだまだ、少ないですね

。これから、歩、知恵、恭子の3人がそのうち登場します。個性的な人たちです。

それはそれでお楽しみということ。

他にも急遽登場する人も出てくるかもしれませんね。

こまめにキャラ設定は載せていきたいと思えます。

キャラ設定ですよっと。(後書き)

キャラ設定は多分こんな感じですよ。でも、勝手に脳みその中で変更されることがあるかも…。その時は、まあ、どうにかします。

ふぁんファンfan(前書き)

次のお友達はファンの子です。

ふあんファンfan

「ほらー、遊びに行こうよー、りよーうー。」

「いやだ、お前の友達まともじゃない。」

ガクガクブルブル

「奈津実は特別なんだよー。他の子は大丈夫だよー。」

特別って言うより特殊、特異だろ。

「とりあえず、今から遊びに行く子の話聞いてよ。それから行くか考えてよ。」

「はあー、聞くだけだからな…。」

1時間近く説得されて続け疲れてきたよ。

「うーんと、これから遊びに行こうかと思っっている子は私の同級生です。白百合恭子って名前。知り合っただのは部活終わった後、女の子にいつぱい囲まれてる時に助けてもらった子だね。」

「なんで女の子に囲まれるんだよ。何かしたのか。」

「いや、ファンの子達だよ。」

ファンいるのかよ！いや、身長高くてスポーツ出来てかっこいいけども。

「ファンの子達に揉みくちやにされてる時、手を引いて助けてくれたんだ。」

「へえ、いい子だな。」

だが、その子もファンの子達の中にいたのだろう。ってことは、きつとそいつもファンなんだろう。

「そのあと、お話したりしていい子だなーって思って連絡先交換したの。」

「へえー。」

「気遣いも出来るし、いい子だし、いい子だし、いい子だし！」

「いい子しかいってないぞ。」

「とりあえず、とっってもいい子なの。だから、安心していいよ。」

「うん。メールの返信の文を聞かせてくれるか？」

「え？なんで？」

「メールに素が出るんだよ。」

奈津実の時の不安感は的中していたしな。

「わかった。じゃあ、読むよ。」

携帯を開いてメールを読む。携帯は使える。まあ、これまでに何台も壊したんだがな。

「『いいですよー 大歓迎です。』 弟さんもくるんですか、わかりました。準備して待っておきますね。楽しみに待っておきます。』、以上。」

「どうだろう、普通だ。華琳にも普通の友達がいたのか…。しかし、フアンの子だよな。…なんか、怖いな。」

「なんか、怖い。」

「えー。おかしい所どこにもなかったじゃん。」

「んー。なんとというか、普通なんだよ。」

「普通じゃないよ。いい子だよ！」

この言い知れぬ不安を伝える手段がどこかにないのか！

「だから、行こうよ。恭子は大丈夫だよ。行こうよ。」

「うん。わかったよ。行くよ。」

「やったー！」

そこまで俺を連れて行きたいのか…。

「ここだよー。」

高級住宅街に並ぶ家を指す。

「結構いいところのお嬢さんなんだな。」

「うん。そんな感じはしないけど、口調はそうかもしれないね。」

「そっか、しかし…俺はなぜまたこの恰好。」

そう、短パン小僧セットだ。

「ごまかしやすいから？」

「…そっか。」

意地でも小学生に見せたいのか…。

「じゃあ、呼ぶよ。おーい。恭子ー。」

やっぱり、インターホンは使わないのか。
シーン。

「おーい。恭子ー。遊びにきたよー！」

シーーーーーン。

「あれ？いないのかな？」

「いや、インターホン使えよ。」

奈津実みたいに玄関で待ってないでしょ。

「ああ、その手があったか。」

思いつかなかったのか。

「ピーンポーン…ダツシュ！」

ピーンポーン。

変な掛け声をつけて華琳がインターホンを押す。

「はい。百合合ですの。ご用件は何でしょうか？」

女の子がインターホンに出る。

「あ、恭子。遊びに来たよ。」

「あ、お姉様でしたの！今開けますわ。」

しばらくして、

「お姉様ー！」

女の子（恭子）が出てくる。

「お姉様よく来てくれましたの。」

手を広げて華琳を迎える。

「うん。来たよ。」

それに応えるように華琳がハグをする。

なぜ、ハグをする。

「そちらの方はどなたですか。」

すっごい睨まれてる。

「弟連れて来たんだ。紹介するよ。弟の涼だよ。」

「そうなんですの。」

「こ、こんにちは…。」

なんか、すごい見られてる。

「小学生で…しょうか？」

「うん。6年生だよ。」

「そうなんですの…。」

なんか、ものすごい見られてるんですが。

「ここで話すのもなんですから家へ入ってください。」

「ふう…。」

なんか、すごい見られてたよ。ところで…。

「なんで、ハグしてたの？」

普通、ハグはしない。

「ん。あれが普通らしいよ。挨拶する時ハグするんだって。外国式だよね。」

「ふうん。」

帰国子女だったりするの？長く外国に住んであそこの習慣になれてるって感じなのかな？

それとも、華琳にだけなのか…。

「ほら、そんなとこで突っ立てないで行こ。」

「あ、うん。」

お城みたいな家に入っていく。

余談「奈津実の家から帰って来て」

「りょーうー！」

がしっ！

「なんだよ…。」

「りょーうー！…！」

ぎゅっ！

「なんなんだよ…。」

「りょーうー！…！」

ぎぢぎぢっ！

「あが、が、し、締まってる…！」

「あ、ごめん。」

拘束を解いてあげる。

「どうしたんだよ。こっちはもういろいろくたくたなんだよ…。」

「いやあ、奈津実に襲われてる時に助けたでしょ。」

「ああ。」

「その時、涼が泣いて『お姉ちゃんお姉ちゃん』って抱きついてきて。」

「ああ。」

「あの時は奈津実の前だったから平静を装ってたけど、すっごい涼が可愛くて。」

「ああ。」

「その時の感情？っていうの、それが蘇って思わず。」

「ああ。」

「涼大丈夫？なんか魂抜けてる感じだけど。」

「ああ。」

「涼は華琳の弟である。」

「ああ。」

「涼は小学生だ。」

「ああ。」

「むう。もういいや、私部屋に帰る。」

無反応なんて面白くない。

ボタン。

「うわー。俺何やってるんだよー。妹に抱きついて『お姉ちゃんお姉ちゃん』って…。」

「うわー。うわー。うわー。うわー。うわー…。」

「うわー。」

そりゃ、怖かったさ。何かにすがりたくもなるさ。でも、妹に『

お姉ちゃん『はねえよ。』

「はあ……。」

……忘ねえよ。

ふあんファンファン(後書き)

この頃、この小説の方向性がよくわからなくなってきた。
いや、きっとこれは涼君を楽しく華琳ちゃんが可愛がる小説だ。
そんな感じで行こう。

かるちゃーショック！（前書き）

まさに！異文化交流の域にまで達した恭子の家。

初めてのお嬢様交流に姉弟（笑）どうなる！！

では、いきましょ。かるちゃーショック！！！！！！！！！！

かるちゃーショック！

「なんじゃこりゃ…。」

入ってまず驚く。

玄関は馬鹿みたいに広く、天井は2階までぶち破ってるんじゃないかと思えるほど高い。

おまけにシャンデリアなんてものがぶら下がっている。

壁とか床はなんかすべすべしてる…。これが世に言う大理石か…。

「小さな家ですが我慢してくださいね。」

これで小さいだと…。

「ねえねえ、涼。シャンデリアがあるよ…！」

華琳が指を差して驚きを俺に伝えようとしている。

「見てよ、でつかい人の絵が飾られてるよ…！」

華琳が差している絵を見る。そこには尊厳な顔つきのおじいさんの絵があった。絵の大きさは人より大きいんじゃないかな…。

「あれは、私のご先祖様ですの。」

「へえー。」

もう、へえーとしか言いようがない。

本当にこんなお嬢様が日本にいたんですね。しかも、妹の友達…もといファン。

「さあ、お上がりくださいの。お部屋でお話をしましょう、お姉様。」

「わかったよ。行く、涼。」

「ああ…。」

まだ若干放心状態の俺はフラフラしながら華琳のあとについていく。

よく見ると、華琳もフラフラしてるじゃないか。

廊下には、色々な絵が飾られていた。どれもどこかで見たことあるような画風だった。

どんな人の絵かはわからないが、きっと高価な絵なのだろう。
俺たちが通された部屋には長いテーブルがあった。

よくテレビで見る、昔の貴族とかが使ってたようなあの長いテーブルである。

「ながーい！」

言わなくてもわかるよ。

「ちょうどおやつ時ですし、お食事も兼ねてここでお話をしましょうか？一応、外にもテーブルはありますけど……。」

「外暑いもんねー。中にしようよ。」

わざわざ、この暑い中外に出ておやつなんて食べようとはあまり思えないな。

「と言う事なのでよろしくね。」

どこに話掛けているのかと思ったら黒服の人がこの部屋を出て行った。

「ひ、ひつじだよ……！涼！」

執事な。ひつじじゃねえ。

「私が子供のころからいる執事ですの。」

本当にお嬢様だ、こいつ。

「お茶とお菓子が来るまでお話ししましょう、お姉様。」

「うん。」

華琳が近くにあった席に座ろうとすると、

「お姉様、私の隣に座ってお話しましょう？」

「わかったよ。」

華琳がテーブルの向こう側に行ってしまう。

「じゃあ、僕も……」

「弟さんはそちら側に座ってお待ちください。」

えっ？なんで？

「わかったよ……。」

疑問を持ちながらも向かい側の席に座る。

「お姉様、聞いてくださいですの。私やっ……」

「ほんとに？すごいねえ」

目の前では華琳と恭子が話をしている。

俺はというと……

「……………」。(キョロキョロ)

キョロキョロと周りを見るだけだ。道でこんなことしてたら挙動不審で警察に事情聴取を受けるだろう。

「うふふ、そうです。すごいですの……」

「でしょでしょ！これで……」

何なんだ！これは！

俺と彼女たちの間に何か壁がある。ATフィールド展開中かよ！

よし、見てる！

いろいろやったんだが……。結局無視された。

無視するどころか途中、恭子に睨まれた……。

「お茶とお菓子ををご用意しました。」

黒い服の人がいつの間にかお茶の準備をしていた。

「ご苦労様。」

「ありがとう。」

「ありがとうございます。」

テーブルにはさまざま洋菓子が出されていた。

「うわー、おいしそー！」

華琳が歓喜の声を上げる。

「気に入ってもらえてうれしいですの。うふふふ。」

本当に嬉しそうに微笑む恭子。

「ね、ね、これ全部食べていいの？」

え、全部食べるの？結構な量ありますよ？

「はい、そのためにご用意しましたの。」

「じゃあ、いただきますーす！はむはむはむはむ……」

華琳は近くにあるケーキを一口に入れてしまう。

行儀がわりいな……。これは流石に注意するんじゃ……

「凄いですの、お姉様！とても豪快でかっこいいですよ！」

い、意味がわからん。何なんだこいつ…。

でも美味しそうだし、俺も頂こうかな。

パクッ。はむはむ。
う、うまい！何だこれは！今までこんなのおいしいお菓子食べたこと
ないぞ！

夢中になってお菓子に手を伸ばしていると、

「ツチ…」

「ん？」

今、舌打ちが聞こえたような…。

「ツチ…ボソボソ…ボソボソ…ツチ…」

何かボソボソ言っているな…何だろう。

顔を上げてみると、恭子が何かボソボソ言っている。

何だ？何ていつているんだ？

華琳の咀嚼音に邪魔されながらも耳を澄ましてみる。

「ツチ、ガキの癖にむしゃむしゃ食いやがって、お前のために用意
してねえんだよ。ツチ、私とお姉様のお菓子なのになんであのガキ
が食べてるんだよ。ツチ、私とお姉様の時間が少なくなってる…」

「……………」

とりあえず、食べるのを止めた。

かるちゃーショック！（後書き）

余談「華琳は太らない体質？」

「お姉様：そんなに食べて大丈夫ですか？」

「ん？何が？」

「何がって…お姉様は運動などをしていて、とてもスレンダー…ですの。でも、そんなにお菓子を食べたなら太ってしまいますの。」

「ああ、大丈夫だよ。私あんまり太らないから。」

「そうですね？うらやましいですね。」

「普段、動いてるからね。食べ過ぎても、胸がむかつくぐらいで何も問題はないよ。」

胸がむかつくほど食べるのは問題じゃないのですか！？

「そうですね…でも、あまり食べ過ぎたら体に悪いのです。少しはセーブしませんと。」

「そう言っても手が止まんないんだよ。美味しすぎるよこのお菓子。」

今度からはお姉様のためにもローカロリーなお菓子をこ用意しませんといけませんの！

そう、心に誓った恭子でしたとさ。

ユリパニ！（前書き）

百合だから仕方ない。ユリユリパニック！

ユリパニ！

「ふあゝ、おなかいっぱい！」

「ふふ、よかったですの。」

「。。。」

「すごいうれしそうだな…華琳。こっちは…」

「ツキ！」

「なんで、度々睨まれないといけないの…？」

「恭子？どうしたの？」

「いいえ、なんでもないですよお姉様。」

「あんな顔した後に、すぐ笑顔に戻るものだろうか…。」

「それよりお姉様、次はどうしますの？」

「うゝん、じゃあ遊ぶゝ。」

「なんだか今日の華琳はくだけた感じだな…。」

「何して遊ぶの？」

「会話に入ってみる。」

「ツキ！」

「っひい！」

「だ、だめだ。何しても睨まれる…！」

「よーし、トランプをしよー！」

「華琳はこっちの状況に気づかない…。気づけ！」

「なら、私の部屋に行きましょうですの。準備お願いね。」

「また、黒服の人が出ていく。」

「ひ、ひつじだよ…！涼！」

「2、2回目だよ…！華琳！」

「じゃあ、私の部屋に案内しますの。ツキ！」

「もう、いやだよー…。」

「ここですの。」

通された部屋には天蓋付きのベッドがあった…。

「お、お姫様のベッドだよ…！涼！」

「う、うん…。」

天蓋付きのベッドなんて初めて見たよ。なんなんだよ、こいつ。

「ねえ…恭子…。」

「なんですの、お姉様？」

「ダイブしていい…！」

「えっ？…いいですけどお姉様、今日はスカート

ポフツ！

言い終わらないうちにベッドにダイブする。

まあ、俺は華琳のパンツなんて見ても面白くはないのだが、一応言っておこう。

白と青のしましまだ。

「死ね！ゴミ野郎！お姉様が汚れる！」

突然、恭子がグーで思いっきり殴りかかってきた！

俺は、それを華麗に…

「うぐっ！」

避けることができず、地面に這いつくばる。

「な、なんで…。」

なんで突然…そりゃ、パンツ見ちゃったけどさ。

「死ね！ゴミ！」

「兄弟…だから…かん…けい…な…い…。」

だって、そうだよな？妹のパンツなんて見ても関係ないよ。ってか、普通に洗濯物で干されてる時とかあるし。ましてや、洗濯物の取り込みとかもやってる俺って！？更に、たたみますよ！？それなのに「涼のエッチ」とか言われた時にはどうしたらいいかと思いましたがよ…。

「ん？どうしたの？」

なにか後ろで物音がした気がするので振り返ってみる。

「いえ、なんでもありません。弟さんが疲れたみたいで休んでるだけですよ。」

「え、涼は体力ないな。」

まったく、悲しいよお姉ちゃん。弟がそんなに体力ないなんて、お姉ちゃん悲しい！

心の中で言ってみる。今はお姉ちゃんだからいいんだよ。

「お・ね・え・さ・ま〜！」

「おっとと〜！」

恭子が胸に飛び込んだ。

「どうしたの〜恭子？」

頭を撫でてやる。

「今日はなんで一人で来ませんでしたの？」

猫撫で声で聞いてくる。かわいい！

「ん？涼は邪魔だった？」

「正直、お姉様だけがよかったです。」

「そっか〜でも、今回の目的は弟の紹介だからね。我慢して？」

「はいですよ…。」

しょんぼりとしている恭子。かわいい！

「また、違う機会に一人で遊びに来るよ。それでいい？」

「はいですよ〜！」

元気を取り戻した恭子。かわいい！

恭子は見ている飽きない。表情がくるくると変わっていく。

「どうしましたの？お姉様？」

恭子が不思議そうに聞いて来る。

「ん？何が？」

「ずっと、私の顔を見て…何か付いてますの？」

「いんや〜恭子は見えて飽きないな〜って思ってたね。」

「そ、そうですよ…？」

「うん、表情がくるくる変わって面白いよ〜。」

「は、恥ずかしいですよ…。」

顔を赤くして恥ずかしがる恭子。かわいい！

「こういうのが見てて飽きないんだよね。」

「それよりもさ〜、恭子〜。」

「なんですの、お姉様？」

「そう、それ。なんで私の事お姉様って言うの？」

「今まで話してきて、何時も気になっていた事ベスト3に入る事を質問してみる。」

「お姉様だからですの。」

「でも、同級生だよ？」

「クラスは違うけど、恭子とは同級生だ。」

「それでも、お姉様ですの。」

「さらに、誕生日も恭子の方が先だよ？」

「それでも、お姉様ですの。」

「ん〜。そっか、なら仕方ないね。」

「どうしてもお姉様なんだろう。」

「そっだ、私も聞きたい事があるですの。」

「恭子が身を乗り出して迫ってくる。」

「な、なにかな？」

「顔が近いよ〜！」

「お、お姉様は女の子同士ってどう思いますの〜！」

「何が？」

「だ、だから！お、女の子同士で…ごによごによごによ…。」

「ん？なんて言ったの？聞こえないよ〜？」

「お、女の子同士で…え、えっちいことする…のどう思いますの？」

「えっ…？」

「えっちいこと？…女の子同士で？…えっ？えっ！？えー！…！！」

「えっ？あ、う…。あう、うん。えっ？えっ！？」

「お姉様…顔を真っ赤にして…かわいいですの…うふふ。」

「あ、あのね。お、女の子同士は悪い事じゃないけど、女の子同士だよ〜！」

「お姉様……………」

え？どンドン恭子の顔が近付いてくるよ？

「きよ、恭子？私達女の子だよ？きよ、恭子！？」

も、もう顔が目の前に…！

思わず目をつぶってしまふ。しかし、何も起こらない。

目を開けてみると目の前には恭子の泣きそうな顔。

「お姉様は嫌…ですか？」

恭子が泣きそうな声で聞いてくる。

でも、恭子は女の子。私も女の子。でも、恭子は泣きそう。

私は女の子で、恭子は女の子で、恭子は泣きそう。

「お、お姉様…？」

恭子は女の子。私も女の子。二人は女の子。でも、恭子は泣きそう。

でも、女の子、女の子の子女の子女の子女の子女のお

「にやつふ！」

ポフッ

「お、お姉様…？どうしましたのお姉様？お姉様！？お姉様！」

大変ですの！お姉様が気を失って目を覚ましませんの！

「…気を失って…目を覚まさない…！」

これは…！やつちゃっていいって合図ですの…！？

「……………お、お姉様…？」

ペチペチ。頬を少し叩いてみる。

「ん…うん…」

「……………」

か、かわいい…！なんですのこのかわいいさ！反則ですの！

「はあ…はあ…お、お姉様…もう、耐えきれませんの！」

がばっ！

「お姉様…！……………あれ…ですか？」

あ…ありのまま今起こった事を話しますの！

私はお姉様を襲っていたら、いつの間にか襲われています

たの。

な…何を言っているのかわからないと思いますの、私も何をされたかわからないですの…。

頭がどうにかなりそうでしたの…百合だとか百合じゃないだとかそんなチャチなもんじゃ断じてありませんの。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったですの…。

「お…お姉様…？」

「はあ…はあ…恭子…。」

いやー！お姉様！顔が近いのです！顔も赤いのです！！息も荒いのです！！！！

「本当は…女の子同士なんて駄目なんだよ…。」

「っ…！！」

それは…わかってますの…。でも…

「でも…私はお姉様が好きですの…。」

「うん…だ、だから…き、キス…ただだよ…！」

「うむっ！？」

お、おお、お姉様と…き、キス！

…もう、思い残すことは何もないですの…。

あわわわわわ！！！！恭子とキスしちゃったよ！いくら勢いとは言え女の子同士なのに…！あわわわわわ！！！！…ん？

「恭子？」

ボケー。

「大丈夫！？恭子！」

「らいじょうぶれすのよ〜おねえさまあ〜。」

「なんかぐでんぐでんになってるよ、恭子。」

「ヒヒ…ウヒヒヒヒ…。」

「きよ、恭子が壊れちゃったよ…。」

それでね。俺がなんて言ったと思います？俺は言ってやったのです

よ！パンツなんて布に過ぎない！布を見て興奮する奴があるか！とね。どうです？もつともでしょう。それで何を思ったのか、パンツを侮辱するな！って殴りかかってきましたね。もう、喧嘩ですよ。喧嘩。本当になんな

「起きてよ！涼！」

「うぐう！」

は、腹に蹴り入れやがった…！

「ちょ…まって、まじ痛い…」

「助けてよ！涼！恭子が！恭子が！！」

助けて欲しいのはこっちだ！バカ！

「恭子がどうしたんだよ…」

人の腹に蹴り入れてまでの用事だ。大したことなかったら…どうしようか。

「恭子がね！恭子がね！…壊れちゃった…」

「ハハ、ハヒヒツツ…」

「……………」

恭子がベッドの上で変な声を上げながら変なポーズをしていた…

「涼！もう、私どうしたらいいかわからないよ…。助けてよ…」

泣きそうな華琳が助けを求める。

「何あれ。何したのお前？」

お嬢様な恭子が…今やオラウータンレベルまで知能が低下している。いや、オラウータンに失礼だ。オラウータンは頭のいい動物だ。

恭子はどうにも言い表せないくらいおかしくなっている。

「わかんないよ…急にあんなっちゃったんだよ…」

「ええ…」

「涼…元のちゃんとした恭子に戻してよ…。あんな恭子嫌だよ…」

「ンチャ！ハヒヒツ…」

元に戻したいのは山々だが、あんなのに近付きたくない。

「と、とりあえず、執事さんに助けを求めれば…！」

「私呼んでくる！」

華琳が部屋から走って出ていく。

間もなくして執事さんと華琳が部屋に入ってくる。

「華琳、ちゃんと言った？」

「うん。ひつじさんに恭子を元に戻してって言ったよ。」

執事さんは恭子のそばまで行って何か耳打ちしている。

「ヒソヒソヒソヒソ……。」

「なんて言ってるんだらうね？」

「さあ、元に戻す呪文でもあるんじゃないか？」

しばらくすると執事さんは帰っていた。恭子はと言つと…

「……………」

「なんかげっそりとしているんだが？」

「恭子大丈夫かな……。」

「お姉様……。」

「恭子？大丈夫？」

「はいですの……。それよりもお見苦しい所見せてしまい申し訳ないですの。」

「大丈夫だよ！私もたまにああなるって！」

お前のはタイプが違うがな！

「私の事嫌いにならないでくれますの……？」

「もちろんだよ！それに……。」

「……？」

「少なくとも嫌いだったらあんな事しないよ？」

「お姉様……！」

ぎゅっ

気絶していた時に何があったかわからないが解決したらしい。

「キッ！」

「ひう！」

なんで睨まれたの俺！？

「そうだ、恭子。」

「なんですの？」

「結構長居したし、私達家に帰るよ。」

「わかりましたの。今度は一人でいらしてくださいの。」

恭子はにっこりと笑ってそう言った。やっぱり俺の事、嫌だったんだな…。

「うん！今度は一人で邪魔しに来るよ！」

華琳も元気にと笑ってそう言った。俺って何のために来たんだろ
う…。

「……………」

あれ？俺が寝ている内にトランプしたのか？

ユリパニ！（後書き）

書いていて途中よくわからなくなってきたけど、涼君をいじめる事には成功した。これでいいのだ。

4000文字も書いたから余談はいいよね？

余談「第42次パンツ大戦」(前書き)

余談でござえます。

余談「第42次パンツ大戦」

「どうして女の子のパンツはつい見てしまっただろうな…。」
「急にどうした？」

勇次が急につぶやく。何事だよいきなり。

状況を説明しよう。今は国立エリート高校（略して国エリ）で友達の浅田勇次郎あさだゆうじろうと一緒にいる。放課後だ、部活も何もしていない俺らは帰るでもなく、町に繰り出すでもなく教室でポーツとしていた。因みに、浅田勇次郎には沢山のあだ名がある。その内の一つが勇次だ。

「いや、だってな。見たいと思っていなくても、上り階段で前を歩く女子のスカートの方に目がいくじゃないか。あれはなぜだろうな…。」

「本能だろ。」

適当に答える。

「本能か…。抗えねえな…そのうち、みーんなパンツの前に跪くんだろう。」

「なんでそうなるんだよ。」

「だってな、本能でも抗えないんだぜ？ってことは、跪くしかないだろう？」

「意味わからねえよ…。」

「いいよな。涼は…身長低くて…。」

「ならお前の身長くれよ。」

勇次は身長が185？くらいある。でけえよな…。

「分けてやりたいよ。いいよな。身長が低かったら女の子のパンツ見放題だよな…。身長高い俺は屈まねえと見えないからな。」

「通報するぞ、変態。」

「変態の後ろに紳士って付けとけよ。実際どう？パンツ見放題？」

「いや、そこまでだな。」

「そつか、じゃあ身長は分けなくてもいいな。」
「そうだな。変態の身長をもらって変態になったら大変だからな。」
「紳士付けるよ。そういえば、お前んとこの妹、この頃高校入ったんだろ?」
「ああ、今年から高校生だよ。」
「いいよな。妹がいて…家の姉貴と交換しようぜ。」
「お前お姉さんいたの?」
「いや、いねえな。」
「え?じゃあなんで交換しようとか言ったの?」
「細けえことはいいんだよ。」
「どつちにしても、妹は渡さんよ。」
「お、お兄さんはシスコンですか?」
「ちげえよ。あんな奴うちの同級生に渡せるか。扱いを間違えると大変だからな。」
「へえ、じゃあ『あいつの扱いが分かるのは俺だけだ!あいつを乗りこなせるのは俺だけなんだ!』ってことだな。」
「聞けよ。あいつはドアを素手で貫通させる女だぞ。手に負えんよ。」
「…そうだな。交換はないよな。でもなくそんな妹でも女の子だぜ。家にパンツとかあるんだろ?え?まさか…!はいてない!?!」
「はいてるよ。」
「そつだよな…はいてるよな…どこにいるんだろうな、はいてない女子高生。」
「いないだろ。」
「いや、俺の大先輩は一度見たことがあるらしい。」
「だれだよそれ。」
「俺の父さんだ。」
「親子そろって変態かよ…。」
「そして、そのはいてない女子高生が母さんだ。」
「な…なんだと…!家族で変態か…。」

「まあ、冗談だがな。」

「お前が言つと冗談に聞こえねえよ。」

「お前の妹のパンツってどんなやつ？」

「無理にでも俺の妹のパンツの話にするか。」

「今の女子高生はエロいからなあ…Tバックとか付けてんのかな…。」

「

「おえー。嫌な想像させるなよ。」

「なんでだよ！妹でも女の子だろ！女子高生だろ！」

「そうだけど、妹をそういう目では見ないよ普通。」

「そうなのか？わからねえな、妹いるやつの思考がわからねえ！」

「と言うか、家の妹は結構激しい運動するからはじめからスパッツ付けてたぞ。」

「パンツじゃないから恥ずかしくないとか思ってるんだろうな…だが、それがいい！」

「本当に変態だよな。」

「紳士って呼べよ。もしくは、ジェントルマン！」

「どっちも意味同じじゃねえか。そして、お前とはかけ離れている。」

「

「この頃の日本では紳士という枠組みの中に変態という勇者達が組み込まれたんだよ。」

「そっか。」

「そうだ。で、スパッツの下にはパンツを穿いているんだろう？」

「もうパンツの話しなくてもいいじゃん。変態について話せよ。」

「だが、断る！ってことは、結局パンツが見えているのと同じってことなんだよ。」

「それだと、『服の下の下着が見えてるんだよ。』って言ってるのと同じじゃないか。」

「よく気づいたな。そういうことだ。」

「どっこういうことだよ…。」

「お前ほどの頭の良さで理解できないとはな…。」

「変態にはついていけないんだよ。」
「変態紳士だ、以後気を付ける。で、お前の妹のパンツの柄はなんだ！早く吐け！」
「なんで、尋問されてんだよ…それに、ここで言ったら変態の仲間入りじゃないかよ。」
「君の参入を待ち望んでいたよ。さあ、きたまえ！夢の国へ！」
「刑務所だろ、夢の国。」
「なら、こういう設定だ。お前は、無理やり、俺に、妹のパンツの柄を、吐かされた！これならいいだろう！さあ！吐け！早く！」
「無地の白。」
「ジャステイス！！！」
「うるせえよ！」
「やはりな！スポーツ少女でスパッツ！中は当然…！白！！！イー
エッスツ！！！」
「叫ぶんじゃねえよ！周りの注目めっちゃ浴びてんじゃねえか！」
「廊下の人がこっちを見ていようが関係ない！パンツサイコー！」
「ただの布のどこがそんなにいいかね…。」
「ただの布ではない！聖なる布だ！」
「ふっ…言わせてもらっぜ。パンツなんて布に過ぎない！布を見て興奮する奴があるか！変態なら変態らしく裸を見る！」
「おい、パンツをなめるな…。」
「へっ、あんな布！ない方がいいんだよ！」
「ば、パンツを侮辱するんじゃない！！！」
「うおお！あぶねえ！」
「そりゃ、はいていない女子高生はみたいさ…だがな、お前は分かっ
ていない！みんながパンツを穿いているからこそ！はいていない
女子高生の価値があるんだ！みんな穿いていないんじゃない意味が
ないか！」
「あきらめる。パンツはただの布だ。裸には勝てん。」
「ふざけるな…！ふざけるんじゃない！勝負だ！チビ野郎！」

「チ…ビ…？…ふ、ふふふ…お前は言っではいけない事を言ってしまった…！いいだろう！受けて立つ！ボッコボコにしてやるよ！木偶の坊！」

「うおおおおおおお！！！！！！！！」

こうして、第42次パンツ大戦が始まったのだった…。

この戦いでは、パンツは布派、橘涼元帥。とパンツは神派、浅田勇次郎元帥が多く犠牲を払いながらも戦いを続けた。その結果、両名は名誉、地位などを落とし。更に、肉体的な打撃を受けた末に和解という微妙な終戦を迎えた。大戦末期には、両名疲れと周りからの視線により『もう、どっちでもいいんじゃないだろうか…。』という心の声に導かれるように終戦へと向かった。

終戦後のインタビューで、橘氏は

「正直、頭に血が上っていた。冷静に考えればどちらでもよかった。」

とコメントしており、一方浅田氏も、

「別に学校で争う必要はなかった。」

と両名ともに苦しい戦いだったということが見て取れます。

取材してみて感じたことは、やはり争いから生まれる事は何も無いのだ。ということでした。

このような悲惨な争いを二度と起こさないように祈るばかりです。

国工リ新聞部部长 渡瀬 燕

「なんだよ…これ。」

「ああ、前の喧嘩が校内新聞に載ってたから切り取った。」

余談「第42次パンツ大戦」（後書き）

余談なんで適当に遊びです。

新キャラの浅田勇次郎と渡瀬燕です。

その場で考えたキャラです。でも、いい味出してると思います！

浅田勇次郎のあだ名は、アーサー、勇、勇次、次郎、変態、紳士など、沢山あります。

渡瀬燕は新聞部の部長としていろいろ取材している人です。基本ネタが主で面白ければいいと思っています。校内ではなかなかの有名人ですね。

二人もその内登場させます。いいキャラだと思うので。

Oh! 買い物! (前書き)

涼君の洋服選びです。

Oh! 買い物!

華琳だよ!

恭子のお家はすごかったね。恭子ってホントにお嬢様だったんだね!

私の部屋がとっても小さく感じるよ。

恭子のあの口調はわざとかな? と思っていたけどお嬢様なら納得だよ。うん。

でも、同級生なのに「お姉様」って呼ばれるの変だよな?

絶対変だよ。むしろ、誕生日で考えたら恭子がお姉さんだよ。

でもまあ、恭子は私より小さい妹でもいいけどね。

でも、私より大きな女の子ってほとんど見ないんだよね…。

話を変えるよ!

今はデパートにいるよ。洋服を選んでいきます。

私の洋服ではない…そう! 涼の服だ!

そろそろ、短パン小僧セットに飽きてきたので新しい服を買おうとね。

涼には内緒だよ。居たら私の選んだ服全部却下されちゃうからね。

「どうしようか…。」

「そうだね…これはどう?」

横を見ると奈津美がいた。服を差し出している。

「あれ? 奈津美?」

「やつほー。」

「なぜここにいるの?」

「たまたまデパートに興味の物を買いに来たんだよ。そしたら、華琳が歩いてるの見たからどこ行くのかな? っけて付いてきたら、真剣に男の子物の服選んでたらから声かけてみたの。」

「そうなんだ。」

「今涼君の服を選んでの？」
「そうだよ。あの服飽きてきたからね。」
「あの服って私の家に来た時着けてたTシャツ短パン？」
「うん。そうだよ。でも、飽きたから次の服買おうかと。」
「今まで着たやつでいいのとかなかったの？」
「うん…それわね…。」
言葉を濁しておかなくやいけないよ。涼の服って今時な奴ばっかで小学生に見えないんだよね。だから、新しい服を買うなんて言えない。言ったら私がお姉ちゃんじゃないってバレちゃうよ。
「うん。涼君の服か…じゃあ、これなんてどう？」
奈津美が選んだ服を受け取る。
「…かわいい。」
「でしょ！これ絶対似合うよ！」
「うん…。」
「だめかな…？」
「色は赤がいいなと思ってるんだけど…どう思う？」
「赤ねえ…緑の方がいいんじゃない？」
「緑か。」
因みに今まで来ていた服は青色の服にわけがわからない英語がプリントされていた服で、下は灰色の短パンだったよ。
「私としては緑色が好きだから緑をお勧めする。」
「私は赤がいいよ。」
「じゃあ、これがいいんじゃないのですか？」
振り向くと恭子がいた。
「あれ？恭子？」
「先日はどうもですの、お姉様。」
「相変わらずだね、恭子。」
「夏休みに奈津美に会うのは初めてですの、お元気ですの？」
「本当に相変わらず馬鹿丁寧だよね。」
「これが私ですの、それに丁寧なのはいいことですよ？」

「恭子はどうしたの？」

「私は…洋服を買いにきましたの。」

「…へえ、お嬢様がデパートに洋服を買いにねえ…。」

「な、なんですの！その疑いの目は！」

「いや、てつきり華琳をつけてきたのかと。」

「そ、そんな事ないですの！変な勘繰りはやめてほしいですの！」

「恭子ならやりかねないからね…華琳も気をつけないよ？」

「うん。分かってるよ。たまに気配を感じるから大丈夫だよ。」

「帰り道に一人なはずなのに後ろに数人の気配を感じるんだよね。」

「きつと、私のフアンの子達だろうね。でも、後ろを振り返ったらみんな隠れちゃんだよね。普通に話しかけてくれたらいいのに…。」

「ツチ！まだ、お姉様を狙う下賤な輩がいるのか…！」

「本音出てるよ、恭子。」

「あんまりカリカリしないよ恭子。」

「…、ごめんなさいですの…。」

「恭子がシュンとしちゃった。かわいい！」

「それよりも、恭子を選んだ服…。」

「奈津美が痛々しそうにつぶやく。」

「赤と緑で縦半分に分かれたＴシャツ…。そりゃ、赤と緑のどつちかが決められないのならどつちも選べばいいけど…これはないな。」

「赤と緑どつちも入ってますの！」

「来てる服は綺麗でセンスもいいのになんて…。」

「半分に分かれてるのは流石に涼でも着るの断られると思うな。」

「二人共…ひどいですの…。」

「更にシュンとしちゃった。かわいい！」

「しかも、女物の服じゃない。」

「え？お姉様の服を選んでいたんじゃないのですの？」

「私のじゃないよ、涼のだよ。」

「これを華琳に着せようとしてたのか…まあ、華琳ならおかしくな
いかも。」

「え、そんなの着ないよ。」

「……………ぐすん。」

な、泣かせちゃったよ！…どうにかしななければ…！

「よ、よく見たらいい服じゃないか！私ちよっと試着してくるよ！」
私は恭子から服を奪い取って試着室に入る。

すぐ服に着替えて鏡を見る。

「…。」

うん。微妙だ…。

「お姉様…どうですか？」

「え！？あ、ああ！いい感じだよ！…布の感じは。」

「そうですね！うれしいですよ！」

「華琳、出てきてお披露目してよ。」

奈津美！余計なこと言っちゃだめ！

「えっ、それはちよっと…恥ずかしいかな…？」

「私もみたいですの！お姉様出てきてくださいですよ！」

「そっだよ、華琳、出てきなよ。」

奈津美は分かってやってるの！？出たら絶対ひどい事に…。

「い、いや…着こなせてないから…。」

「華琳、諦めて出てきな。」

「…やっぱり、私の選んだ服なんて…。」

「で、出るよ！出るからそんなに自分を責めないで！」

う。絶対奈津美に笑われるよ。

「早く出でこーい。」

「…やっぱり…私なんか…そうですね、樹海に行きたいですよ…。」

一刻を争う事態になってる…恭子のために出なければ…恥ずかしいなんて言ってられない！

バツ！

勢いよく試着室のドアを開ける。

「ど、どうかな？」

「く、つぶ、つぶ、た、耐える私！」

奈津美は笑いを抑えている。後で覚えてろ。

「いいですよ！やっぱり私の目に狂いはなかったですよ！」

「つぶ、つぶ、あははは！駄目！やっぱり耐えられない！はははは！待ってその服はないよ！あははは！なのに、恭子、褒め、つぶ、あはははは！」

「えっ…そうなんです…お姉様？」

「だ、大丈夫だよ！奈津美がちょっとおかしいだけだよ！」

「お、おか、おかしいのは！はははは！華琳だよ！あはは！お、おかしい！」

「奈津美は頭がおかしくなってしまったですよ…このTシャツが似合うのはお姉様だけですの！」

「あははは！ま、待って、わ、笑い死ぬっ！や、やめて、もう、やめて！あははは！」

「と、とりあえず、これ以上は恥ずかしいから着替えてくるね！」
これ以上は恥ずかしくて恥ずかしい！もう、笑われるのは嫌だよ。

「ふう…、疲れた。」

着替えて出てくる。

「はあ…。」

奈津美が笑いすぎて放心してる…。

「お姉様、さっきの服は買いますの？」

「うん…今回は涼の服を買う分のお金しかないしな。」

「なら、私から送らせてもらいますの！」

えっ…！？

「い、いや！悪いよ！結構高いだろうし…」

赤緑Tシャツの値段を見る。980円…。

「遠慮する必要はないですよ！これくらい貢ぐのなんて屁でもありませんの！」

「恭子…貢ぐって…。」

放心状態の奈津美が反応する。

「でも、やっぱり買ってもらうのは悪いよ……。」
「いいんですの！私が買いたくて買って、お姉様に送りたいくて送るだけですよ！」
「うん。そこまで言われて断るのは悪いよね……。うん。買ってくれるなら嬉しいよ！」
「それより……涼君の服選びましょ……。」
放心状態の奈津美がふらふらと歩いていく。
「そ、そだね。じゃあ、いこっか。」
「はいですよ！」

結果的に涼の服はオレンジのTシャツに紺色の短パンになりましたとわ。

Oh! 買い物! (後書き)

今回はガールズトーク的な感じでお送りいたします。

一応、同学年で共通の華琳という友達を持つ奈津美と恭子は友達です。

でも、最近知り合ったばかりなので、まだちょっと他人行儀などにはあります。だが、他人行儀であそこまで笑えるだろうか…。
そついう壁が崩れるのも時間の問題でしょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6637s/>

姉弟演技

2011年7月2日03時20分発行